宇古木亭

KanColle Fan-Fiction Novel Vol.7

妄想拡張ディスク

現役女子高生 コスプレイヤー榛名

-JK Cosplayer Haruna Imagination Appended-

宇古木蒼
UKOGI AO
画:まりりん
Maririn
装丁:星崎連維
Renn Hoshizaki

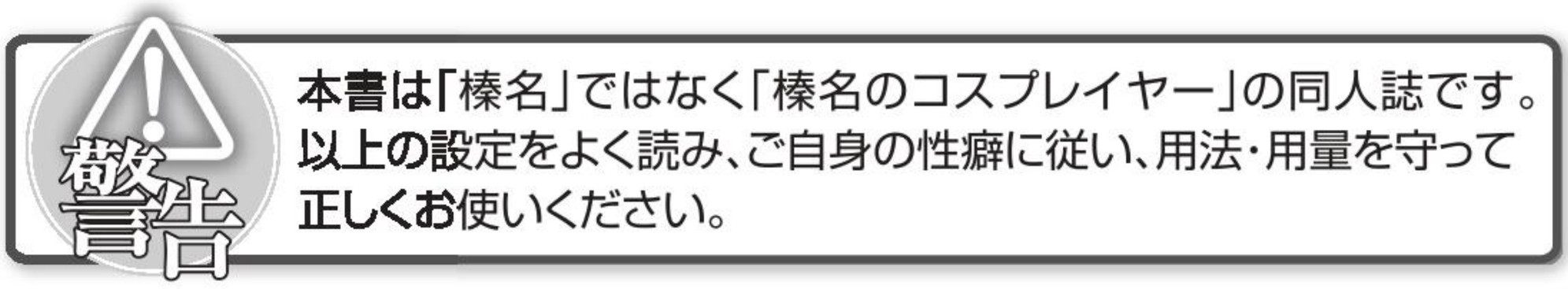
人気現役女子高生コスプレイヤー・春菜ちゃん。
Hカップ隠れ巨乳のコスパコ援交シリーズ、妄想さらに拡張編！

宇古木亭

妄想拡張ディスク

現役女子高生コスプレイヤー様名

-JK Cosplayer Haruna Imagination Appended-


警告
本書は「榛名」ではなく「榛名のコスプレイヤー」の同人誌です。
以上の設定をよく読み、ご自身の性癖に従い、用法・用量を守って
正しくお使いください。

第１章

春菜と初めての彼氏、そしてコスプレ

シャワーを止めると、水音の止んだ浴室に静寂が満ちる。

浴室から出て洗面所の鏡の前に立つ。Hカップの大きな胸にくびれた腰、豊かなヒップの少女が鏡の中から私を見返す。髪をまとめていたタオル取ると背中の中程まである艶やかな黒髪がはらりと落ちる。

同年代なら誰にも負けないくらいの身体をしていると思う。それを維持するための努力だって日夜欠かしてはいない。

だって私は――コスプレイヤーなのだから。

「春菜ちゃん、こっちは準備出来たから」

「はーい。サイトウさん、いま着替えますからちょっと待っててくださいね」

ベッドルームの方から声をかけてきた男に返事をする。視線を下げれば、綺麗に畳んで置いてある『榛名』のコスプレ衣装がある。

この部屋は彼――サイトウ――が撮影のために取ってくれた高級ホテルの一室だ。これからこの部屋で、次のイベントに向けての新作コスプレ写真集ROMの撮影が待っている。

鏡を見ながら衣装を身につけ、私は女子高生の春菜から『榛名』になる。

「じゃあ、撮影始めようか」

「はい。可愛く撮ってくださいね？　期待してます」

広い高級ホテルの一室、窓のそばで私は彼のカメラに向かってポーズを取る。カメラ越しにでも彼の視線が私の身体に欲情しているのがわかる。

そのことは別に構わない。彼と私は既に単なるカメラマンと被写体ではないのだから。

成り行きで彼が私を抱いたあの夜以来、私は彼に身体を提供し、彼は私のコスプレイヤーとしての活動を資金や機材の面から援助する関係が続いている。

なんたってカメラマンとしてのサイトウさんの腕は折り紙付きだ。サイトウさんに撮影してもらったコスプレROMはどのイベントでも大した売れ行きだった。

そういえば。
榛名のコスプレであられも無いポーズをとって写真に収まりながら私はふと思い出す。
別れた彼氏――私にとって初めての彼氏だった彼。彼にこうして、榛名のコスプレ衣装を着させられて抱かれたときのことを。

＊＊＊＊　一年前　＊＊＊＊

「うぃーっす　春菜、待たせたな」
「大丈夫だよ、私もいま来たばっかりだから」
校門を出てから一ブロック、角を曲がったところのコンビニの前で待っていると彼がやってくる。横に並んで歩き出すと同時に私はそっと彼の腕を取る。
同い年で幼馴染みの彼から告白されたのは中学校の卒業式の日だった。
高校は違う学校になってしまったので会えるのは放課後だけだけれど、こうして毎日迎えに来てくれて一緒に帰っているから寂しさはそんなに感じない。
彼の家は、ここから私の家まで歩いて帰る途中にあるでここからの帰り道はずっと一緒だ。歩いて通学できる距離の学校に進学した私に対して、彼はバスで十五分の所へ通っているので朝は徒歩とバスで別れてしまって会えない。
だから毎日こうして帰りに迎えにきてくれるのは本当にありがたい限りだった。
「春菜、今日……　うち、寄っていける？」
「……うん」
そして、大事なことはもう一つ。
転職して急に忙しくなったとかで、最近は彼の両親は週に二、三回のペースで深夜まで帰ってこなくなった。おかげで彼の両親の帰りが遅い日は一緒に帰ったら流れで私はそのまま彼の部屋にお邪魔している。

健康な高校生のカップルが親の居ない家で二人きりになったらどうなるか。平凡な私たちは、誰もが想像するとおりの成り行きを迎えていた。

「お邪魔しまーす。んぅっ……　待って、部屋に行ってから……」

彼の家に到着して二人で玄関をくぐる。ドアを閉めて外の目が無くなると同時に抱きしめられてキスをされる。

そのまま乱暴に胸を揉みしだかれ、スカートをめくられて下着の中に指を入れられる。

最近とみに大きくなりセーラー服の胸元を押し上げる胸をブラジャーごとこね回されて私は痛みに眉をしかめる。

「きょうは体育の授業で汗かいちゃったから……シャワー浴びてから、ね？」

そっと突き放すようにして彼を押しのけると途端に不満そうな顔をされて悲しくなる。

「俺、昼間ずっと春菜のことと考えててさ……　やっと会えたから、もうこんななんだよね」

彼が自分の股間を指差すと、そこはズボンの上からもはっきりとわかるくらい勃起していた。というより、二人で一緒に帰っている途中から彼はあからさまに勃起していて、隣を歩いている私は少し恥ずかしかった。

「Hは部屋に行ってからでいいから、とりあえず口と手でしてくれない？」

そう言いながら彼はねっとりとした視線を私の全身に向ける。この様子では断ったら無理やりこの場で挿入されてしまうかもしれない。

気づかれぬように小さくため息をつき、私は彼の元にひざまずく。ベルトを外してズボンとトランクスを下ろすと赤黒く充血した彼のペニスが天を衝く。

手で扱きながらペニスの先端にキスをすると彼は興奮した息を漏らす。初めて見たときにはあまりにグロテスクなのでまともに視線を向けられなかった彼の勃起したペニスも、何度もこうしてしゃぶらされている

うちにすっかり見慣れてしまった。
「春菜……　いいよ……　そう、そこ」
「こう？」
唇をすぼめて先端の膨らんだ部分を集中的に刺激しながら、指で輪を作って根元の辺りを同時にきつくしごき上げる。ずっと口の中に含んでいると顎が疲れるので時折ペニスから口を外し、裏の辺りを舌で舐めたりして休憩する。首が少し辛いけど、視線はなるべく上げて彼の顔を見るようにする。
私のフェラチオに彼は膝をがくがくとさせ、目をつぶって眉を寄せて快感に耐えている。舐めさせられるのは辛くもあるが、こうして恋人が自分の奉仕で快感を得てくれることがダイレクトにわかるのは喜びを感じる。
ペニスのびくつきから彼が射精間近なことを察した私は喉の奥に届くほど深くくわえ込む体勢に変更し、頭を大きく前後させてラストスパートを掛ける。
最初の頃はペニスをどれくらい強く扱って良いものかわからずおっかなびっくりだったから、弱い快感しか得られない彼はいつまでも射精できず三十分近くくわえ続けて私の顎が外れそうになってしまったこともあった。
そうならないように今では強すぎると思えるくらい刺激して手早く射精してもらうことにしている。このやり方で不満を聞かされたことはないし、私も顎が疲れないので一挙両得だ。
「うあっ　春菜っ　イク……　眼鏡にかけるよ？　良いよね？」
ぷはぁっ……　え、ええっ？」
ひときわ大きく彼が身体を震わせると射精が始まる。それと同時に彼はペニスを口から引き抜き、私の眼鏡に先端をこすりつけた。
どくどくと吐き出される白濁液が、つい先日に新調したお気に入りのピンクのアンダーリムの眼鏡を汚す。眼鏡から精液が垂れてきた精液の濃厚な匂いに私はえづきそうになる。

「びっくりした……」
「ごめん春菜。でもその眼鏡かわいいから……　ついやってみたくなって」
眼鏡を外し、レンズに精液がべったりと付着したそれをぼやける視界で眺めて私は途方に暮れる。可愛いといわれて嬉しいことは嬉しいが、それとこれは話が別だ。精液はタンパク質だから石鹸で取れるだろうか、となおも何か弁解している彼に生返事を返しながら私は考えていた。

＊

「春菜、春菜、出すよっ!!」
カーテンの閉め切られた薄暗い彼の部屋。部屋の壁の本棚にはラノベと漫画が並び、ゲーセンのプライズで取ったフィギュアが並べられている。
その部屋の狭いベッドの上で彼に組み敷かれた私は、なすがままに彼のペニスを受け入れている。
彼がコンドームに射精しながら私の身体の上に倒れかかってくるのに抱きつく。毎日のようにこうして学校帰りにこの部屋でセックスしているので二人の匂いがすっかり染みついたベッドで、私たちはしばらく固く抱き合う。
「春菜、気持ちよかった？」
「……うん、すごくよかったよ」
身体を起こしてペニスを私の中から抜いた彼が、精液のたまったコンドームの始末をしながら訊ねてくる。わだかまる思いを押し殺して私はにこやかに彼に向かってうなずく。
玄関先でフェラしたあと、シャワーを浴びて身体と眼鏡を綺麗にした私は彼の部屋で抱かれていた。彼は私の中に入れるとすぐに射精してしまうので、いつも気持ちよくなりきれないままだったりする。そのくせ回復力はあるので、すでに今日は玄関先でのフェラを含めて三回も射精していた。
つきあい始めの頃はもっと初々しかった。告白され

てから初めてのキスまで一ヶ月かかったくらいだ。
あの頃は彼の両親が家を空けていなかったのでこんなにセックスばかりでなく、二人でゲーセンに行ったり、カラオケに行ったり、公園のベンチで暗くなるまでずっと話し込んだりしていた。
だけど彼の両親が家を空けるようになって全てが変わってしまった。
初めの頃は彼が私の身体に欲情してくれるということそのものが嬉しくて、多少の雑さはなんとも思わなかった。だがこうしてセックスするのがお互いの日常になっていくにつれておざなりな前戯で挿入しては私が絶頂する前に一人で射精してしまう彼に私は密かに不満を溜めていた。
コンドームを片付けた彼はトランクスとTシャツを身につけてパソコンに向かっている。終わったあとはキスくらいしてくれたらいいのに……　と軽く不満を抱くのも、もう何度目になるかわからない。
でも、お互いに初めての恋人同士なのだし、きっとこんなものなのだろう。これからゆっくりと二人で上手になっていけば良いんだ。
最近はこうして部屋でセックスしてばかりなのでいいかげん二人でどこかに遊びに行ってみたいと思わないでもない。一緒に居られるだけで楽しいからセックスはなくてもいい……　と遠回しに言ってみたこともあったが彼にはいまいち伝わらなかった。
そこに転がっていた彼のシャツを全裸のうえに一枚だけ羽織る。何かパソコンに向かって熱心にやっているのが気になって、立ち上がって彼が凝視している画面を後ろからのぞき込む。
「なにしてるの？」
「んー、艦これ。春菜は知ってる？」
「かん、これ……？」
彼が指差した小さい画面にはセーラー服に身を包んだ少女が機械を背負い、大砲のようなものを持って立っていた。新作のアニメだろうか。
『お疲れ様です!! 司令官』

彼がマウスを持っていって少女をクリックするとスピーカーからボイスが響く。

「わ、喋るんだ」

「こんなんで驚いてちゃ早いぜ」

彼がマウスで画面の『出撃』と書かれたボタンを押し、何回か画面が切り替わる。

『私がやっつけちゃうんだから!!』

先ほどと同じ声優のボイスがまた響く。『戦闘開始』と画面に表示され暗転のあと、海を思わせる水色の背景に少女の顔の描かれた短冊上のカードが六枚並ぶ。遅れて画面の反対側には黒っぽい何かが同じく六枚。

『いっけぇ!!』

『なのです!!』

『そんな攻撃、当たんないわよ?』

つぎつぎにスピーカーから流れる声と同時に少女達の描かれたカードが動き、黒っぽい何かが描かれたカードを攻撃する。何度かそれを繰り返し、黒っぽい何かのカードは全て爆発して青白く『撃沈』のマークがつく。

切り替わった画面に『勝利 -S-』と表示される。

『進撃』『撤退』と二つのボタンが表示された画面で彼は迷わず『進撃』を押す。そうして先ほどのような戦いを何回か繰り返したあとで、画面は最初のセーラー服の女の子が立っている表示に戻った。

いまいちなんだかよくわからなかったけれど、女の子のキャラを集めてモンスターと戦うゲームみたいなものなんだろうか?

切り替えると、カードのような長方形の中にセーラー服の武器を背負った女の子たちが描かれた画面になる。ウィンドウに並んだ長方形のなかにはいくつか空きがあり、きっとそこは彼がまだ手に入れていないキャラの描かれるところなのだろうと推測する。

「あ、これがさっきの画面に立ってた娘?」

素朴なセーラー服に身を包み、大砲を構えた黒髪の少女を指差す。そのイラストには『吹雪』の文字が重

ねられていた。
「そうそう、こいつが吹雪」
『ワシントン条約制限下で設計された、世界中を驚愕させたクラスを超えた特型駆逐艦の1番艦、吹雪です。私たちは……』
画面が切り替わり『吹雪』の自己紹介が流れる。ネットで遊ぶタイプのこういうゲームにしては随分と喋るので私は感心してしまう。
「一昨日に学校の友達から教わって初めてたんだけどすっかりハマっちまった。春菜もやってみない？」
「なんだか難しそう……」
「大丈夫、春菜にも出来るよ。反射神経いらないから」
「むー、私だって、好きで下手なわけじゃないもん」
だいぶむかし彼とゲーセンに行ったときに反射神経を要求されるゲームはからっきしだったのを覚えていたのか。覚えていてくれたことに嬉しくなると同時に馬鹿にされたようで悔しくなる。
「まあ、そう怒るなって」
笑ってやり過ごした彼はもう一度パソコンに向き直り、今度は私に解説してくれながらいろいろと画面を切り替えたり戦ったりしていく。
駆逐、軽巡、重巡、戦艦、空母……　いろいろと性能の違う女の子のキャラが百人以上いて、それを集めながらあのモンスター――深海なんとか、と彼は言っていた――を倒していくゲームなのだとか。
「この娘たち、軍艦なの？」
軍艦というか、なんつーか。擬人化ってやつ？」
なんでもこの女の子たちはみんな昔の日本の軍艦を擬人化――人間で無いものを人間の形で描いているらしかった。
小一時間ほど解説されて私はおおよそどんなゲームか理解する。確かにこれなら反射神経がなくて鈍い私でも遊べそうだった。
彼と共通の話題があるのは悪くない。なにより、この「艦これ」はパソコンでしか遊べないゲームらしい。スマホで遊ぶゲームに夢中になった彼氏が構ってく

れなくなった、なんて話を友人から聞いたことのある私にとってはそれは安心できるポイントだった。

彼と別れて自宅に帰り、両親との夕食のあと私は自室でノートパソコンの電源を入れる。

彼にLINEで教えてもらいながら登録を済ませてゲームを始める。最初に五人の女の子――軍艦なので『艦娘』と言うらしい――から一人を選ぶように求められたので、彼の家で見覚えのある『吹雪』を選ぶとゲームが始まる。

表示されたのは彼の家で見たのと同じ母港の画面だ。ふと思い立って画面に立っている吹雪をクリックしてみる。

『お疲れ様です!! 司令官』

わかってはいたものの、やはりこうして声が出るとびっくりしてしまう。

「お疲れさま、だって……」

まるでこちらに話しかけるような台詞に、なんだかおかしくなって私はひとり笑ってしまった。

それからの私の日課には新しく艦これが加わった。朝起きて、学校に行き、帰りは彼を待ち合わせて一緒に帰り、彼の両親がいないときには彼の部屋でセックスする。彼と別れて自宅に帰ったら、学校の課題を済ませたり彼や友人と電話やLINEしている間にながらプレイで艦これを進める。

最初は片手間と言ったくらいで遊んでいた。だが、艦娘が段々増えて強くなっていくに連れて私は熱中しだした。

艦これは彼の言ったとおり反射神経の要らないゲームでそこが私にはとてもありがたかった。代わりに大事なのは良く考えて戦いの前に準備をしておくこと、遠征や入渠を計画的に行うことだ。

色々考えてこつこつと準備するのは性に合っていたので、私にとっての艦これはとても楽しいゲームになった。

軍艦について何も知らなかったのは問題にならなかった。ただ可愛い女の子キャラがたくさん出てくる

ゲームとしても遊べて気が楽だった。
艦これを始めてから一週間ほど、こつこつ遠征で貯めた資源を使って初めての戦艦の建造に踏み切った。
誰が出てくるのだろうか？　金剛？　扶桑？　それともまさか、長門――？
ドキドキしながら私は工廠で『建造開始!!』のボタンを押す。
『高速戦艦、榛名、着任しました。あなたが提督なのね？　よろしくお願いいたします』
クリックと共に現れたのは長い黒髪を振り乱し、巫女服のような衣装を身につけ、背中に大きな大砲を背負った少女だった。
「はる、な……」
その名を呟く。私と同じ名前――はるな――の彼女が最初に出てきた戦艦娘というのに、少しだけ運命のようなものを感じてしまう。
さっそく榛名を艦隊に入れて出撃してみる。これまでに使っていた駆逐や軽巡とは桁違いの攻撃に一撃で敵が消し飛んでいく。
『やだ、こんな……　でも、まだやれます!!』
魚雷で攻撃された榛名はまだレベル1だからか中破してしまう。半裸の彼女が忍びなくなった私は『撤退』ボタンを押して母港の画面に戻った。
建造されたときの凛とした雰囲気はどこへやら、煤けて破れた衣装をはだけた榛名が痛々しい。
『はい、榛名は大丈夫です!!』
まるでこちらの心の内を読み取ったかのような台詞に驚いて手が止まる。画面の中の榛名はこちらを瞬きもせず――当たり前の話だが――見つめている。
「ごめんね、榛名」
思わず謝ってしまった自分に自分で驚く。それが、私と『榛名』の出会いだった。

＊

「おっ、そろそろ戻ってくる時間じゃん」

壁の時計に目をやった彼はやおらベッドから起き上がって机の上のパソコンに向かい、セックスが終わったあとの気だるいひとときを彼に腕枕をして楽しんでいた私はいきなりのその行動にびっくりする。

「戻ってくるって、なにが？」

「ん？　そりゃあ艦これの遠征に決まってるでしょ」

彼の答えに納得する。私も毎朝学校に行く前に、帰宅したところでちょうど戻ってくるように見計らって遠征に出していた。

「演習もやっとかないとな……」

「私、きのう『榛名』出したんだ」

彼の気を引けるかと思って何気なく『榛名』の話題を出してみる。

「春菜、もう榛名を持ってるの？　すげーな、羨ましい」

「そんなにすごいことなの？」

ネットに書いてあった戦艦建造レシピでやってみたら最初に出てきたのでそういうものかと思っていたが、もしかして私はラッキーだったのだろうか？

「俺なんてまだ金剛型は一隻も持ってないのに」

悔しそうにする彼。だがこればかりはどうにもならないことだと艦これを始めて間もない私にもわかっていた。

ネットで調べて知ったのだけど、こういう女の子キャラを集めるゲームにはだいたいプレイヤー同士で持っているキャラを交換する機能が備わっているらしかった。だが、艦これにはそれが無い。

「榛名、可愛いから欲しいんだよなー　あ、今のは春菜のことじゃないよ」

「もう、わかってるって」

どちらも『はるな』なのでまことに紛らわしい。『はな』『みゆき』それに『さつき』。軍艦には女の子のような名前が随分と多いというのは、艦これを遊びだして初めて得た知識だった。

「それにもう、春菜は俺のものだもんな」

冗談めかした彼はベッドから起きて全裸のままだっ

た私を抱き寄せられる。そのまま彼の手が私の尻から腰、そして胸へと這う。

彼に胸を軽く揉みしだかれ、思わず私は小さく喘ぎを漏らす。

しばらくそうして抱き合ってから、身体を離した彼は唐突に大声を上げた。

「そうだ!!　良いこと思いついた……　春菜、榛名のコスプレしてみない？」

「え、ええー？」

はるな、はるなと繰り返されて混乱する私に彼は告げる。

「艦娘の榛名のコスプレってこと。髪はこのままで良いし、胸もあるし、似合うんじゃね？」

確かに艦これの榛名と私の髪は同じくらいの長さがあった。胸は放って置いても勝手に大きくなったけれど、背中の中ほどまであるこの髪を艶やかに保っているのは自分の努力の賜物だから私は自分の髪が密かに自慢だった。

真っ黒のままだと重いよ、すこし茶色にしてみたら、と友人達からよく言われるが彼が黒い髪を好きだと言ってくれたので染めたりはしないでいる。

「えっ　でも……　恥ずかしいし。　それに、ああいう衣装って高いんでしょ？」

「似合うと思うんだけどなあ」

裸の私の全身をじろじろと彼の視線が這い回る。きっと彼の頭の中では私は榛名の衣装を着せられているのだろう。

恥ずかしくなってその視線から逃げるようにして身をひるがえし、ベッドの上からタオルケットを取って身体に巻く。

「春菜にコスプレしてもらって、一緒にイベント行ったりとか面白そうだと思ったのに」

「別にイベントなら私がコスプレしなくても行けるじゃない」

イベント、すなわち同人誌即売会ならオタクになり始めた小学校の高学年のころから地元のコンベンショ

ンホールで開かれる小さなものに何度か行っている。少しネットで調べたところでは、艦これも人気の作品らしくなんどもイベントが開かれているらしかった。

二人でイベントに行くデートってのは良いかも、でもコスプレは恥ずかしい……と頭を悩ませる私をよそに彼は伸びをして立ち上がる。

「春菜、代わりに演習やっといてくれる？　今の第一艦隊のままなにも変えないで良いから」

「うん、いいよ」

そのまま彼がシャワーを浴びに行くのと入れ替わりで私はパソコンに向かう。艦これを毎日遊んでいるので演習をするくらいならもう慣れたものだ。

彼の言うとおりに第一艦隊をなにもいじらずに演習へと出撃させる。頬杖をついて画面を眺めていると、いまいち有効打を与えられない彼の艦隊に対して相手の艦隊は次々と攻撃を命中させていく。

「B勝利かあ……」

なにも変えなくて良いと言われているので自分は悪くないとわかっているが釈然としない。よく見てみると彼の艦隊は駆逐と軽巡ばかりで、あとは重巡が一隻いるだけだった。これでは戦艦や空母が混じった演習相手に勝つのは難しい。

榛名、重巡は数隻ほど持っていてそろそろ空母が欲しいと思っていたところだ。ネットに載っている建造レシピとドロップマスを参考に遊べばそれくらいはすぐに揃うのではないだろうか。

とはいえ、なにも変えるなと言われている以上この艦隊で演習をこなすしかない。B勝利や敗北を重ねながら残りの四戦の演習を終わらせる。

彼は思い込みが強く、自分の意志を何を言われようと曲げないところがあった。私にとってその意志の強さは好ましいものだったが、もしかしたらそれがたって艦これをするときにネットの情報をあまり参考にしないでいるのかもしれない。

演習を終えてすることのなくなった私は、手慰みに

マウスをもてあそぶ。適当な場所をクリックするとウィンドウが艦これのゲーム画面から切り替わる。

「あれ、これって……」

画面に映したのはインターネットの画像検索結果だった。そこには、榛名のコスプレ衣装に身を包んだコスプレイヤーたちがそれぞれにポーズとった写真が並んでいた。

いきなり私に榛名のコスプレを勧めてきたのはこれが理由だったのか。納得しながら私はしげしげと榛名のコスプレイヤーたちを見ていく。

画像検索結果に出てきているコスプレイヤーたちは確かに顔立ちはみな美人だったが、手入れの悪い黒髪のウィッグがそれを台無しにしていたり、貧弱な身体の上に金剛型の衣装を着込んだので胸元がブカブカになったりしていた。

自分のように長く綺麗な黒髪を保っている女性はそういない。同じく、私くらいの巨乳も珍しい。

さっきの彼の言葉もあり、これなら私の方がよっぽど榛名が似合うかもと思ってしまう気持ちを止められない。

「春菜、シャワー終わったぞー」

風呂場を出た彼の声が遠くから響くと私は慌ててウィンドウを切り替えて艦これに戻す。

「演習、どうだった？」

「うーん、あんまり勝てなかった」

「そうなんだよなー　なんか勝てないんだ。どうしたら良いんだろ」

風呂上がりの上機嫌で部屋に戻ってきた彼は私が何を見ていたか気が付いていないようだった。密かに胸をなで下ろしながら、私は先ほどのコスプレイヤーたちの姿を思い返して心の中になにか黒いものが貯まっていくのを感じていた。

「ただいまー」
彼に別れを告げて帰宅し、両親との夕食を取る。ちなみに毎日こうして遅くなるのはクラスの女の友人達と遊んでいることにして、私と同じく彼氏持ちの友人たちとは口裏を合わせてある。
部屋に戻ってパソコンの電源を入れると、いつもなら艦これを立ち上げる所を私は『榛名　コスプレ』で画像検索する。
「わあ……」
画面に広がるのは彼の家で見たのと同じ画像たち。あらためてそれを眺め、ここに写っているコスプレイヤーたちよりも自分の方が榛名をうまく再現できるのではと思ってしまう。
姿見の前に立って鏡に映る自分の姿に榛名の衣装を想像の中で重ねてみる。
一度芽生えた疑問はどうしても脳裏から消えてくれず、艦これを起動して秘書艦の榛名が現れるとますます強くなる。

そうして過ごすことしばらく。その間もいつものように放課後は彼と一緒に帰り、両親がいない日は彼の部屋でセックスする日々が続いていた。彼の目をかいくぐってパソコンを見ると決まって艦娘のコスプレの画像にアクセスしていて、その中でも最も多かったのは榛名の画像だった。
もしかして私の居ないところでこういうコスプレ画像を見てオナニーしたりしているのだろうか。そう考えるとちょっと嫉妬してしまう。
彼は何度か榛名のコスプレの話を出してきたが、私が曖昧な返事を返しているうちにそのうち話題には出なくなった。
だが話題に出なくなってからも彼が榛名のコスプレの画像を見ている頻度は上がっていた。こっそり彼のパソコンに保存されている画像をチェックすると案の定たくさんの榛名コスプレの画像が見つかった。
そうして気持ちが揺れていたところで出会った、友人達と遊びに行った池袋のとあるコスプレショップで

安売りされていた榛名の衣装。
少し高額だったが貯金をはたけば買えない額ではなかったそれは、私に決心させるに十分だった。
そしていま、部屋には榛名の衣装がある。
部屋着を脱いで下着姿になり、衣装を手にとって姿見に向かう。金剛型の衣装は作りが難しいので着るのにだいぶ時間がかかった。
首から垂れ下がっている白い布、お尻の所でスカートの上に出さなければいけない白い布など、おおよそ目に付く難しいポイントは榛名のイラストと自分を見比べながら調整する。
この辺りがうまく出来ていなくてゲームの中のイラストとズレているコスプレイヤーはネットで検索して出てくる写真の中にも腐るほどいた。ああいうのと同じになってはいけない。
「……よし、完成かな」
姿見には『榛名』のイメージ通りの姿が写っていた。
このために眼鏡も外して、むかし作っていたコンタクトレンズに替えている。自惚れかもしれないが良く似合っているのが嬉しく、私はスマホで鏡の中の自分のコスプレ姿を撮影する。
彼には榛名の衣装を買うことについて何も告げていなかった。この写真を送ったら、彼はどんな顔をするだろう。
私がこれを着ていればもうネットで榛名の画像を検索して見ることなんてなくなるだろうか。不安と期待に胸を膨らませながら、私はコスプレ姿の自撮りを彼に送る。
『すごい似合ってる』『もっと写真見せて』
彼からのメッセージにはこうあった。着替えに時間を取られてもう遅いので一枚写真を送ったらもう着替えようかと思っていたが、彼に応えるべくもう何枚か写真を撮って送る。
『もっとアップで撮れる？』『横向きとか』
私が写真を送ると一瞬で返信がくる。あまりのがっつき振りに呆れてしまうと同時に嬉しくもなる。

ネットで榛名のコスプレ写真をあれだけ見ていた彼がここまで食いついてくれるのだから、それだけ私の榛名は完成度が高いのだろう。

彼の要求に応じてポーズを取って写真を送る。その繰り返しで夜が更けていく。

「あれ、もうこんな時間……？」

気が付けば部屋の時計はそろそろ日が変わろうかという時刻を指していた。残念そうにする彼にもう写真は終わりだとお休みのあいさつを送り、私は一息ついてまず榛名のカチューシャを外す。

スマホの中は彼に送った榛名コスプレの写真でいっぱいになっている。これだけ送れば、もう彼はネットで榛名コスプレの写真を探したりしないで済むのではないだろうか。そう考えると、なんだか私はすかっとして嬉しかった。

私が送った榛名コスプレの自撮りで彼はとても喜んでくれて、次の日に会ったときには衣装を持ってきて目の前で着てくれとまで言われた。

私としても彼が喜んでくれるならそうしたいのは山々だったが、パーツの多い金剛型のコスプレ衣装一式は嵩張って目立つので学校に持っていくわけには行かなかった。

平日に学校からいちど自分の家に帰って、榛名コスプレの大荷物を抱えて彼の家にもう一度行くのも往復に時間が掛かりすぎて難しかった。

私の両親は門限に厳しい方ではないが、それでも夕食を過ぎる時間に帰ってくるのにいい顔はしない。おかげで目の前で着てあげる代わりに、部屋で一人で榛名コスプレをして彼に送るのが毎晩の習慣になっていた。

「こんなに撮ったのね……」

自分のスマホの写真一覧を眺めて私は独りごちる。彼に求められるがままに毎晩姿見の前で撮っていたら、いつの間にか榛名コスプレの写真はものすごい枚数に達していた。最初はただ立っているだけで満足していた彼も、だんだんと要求がエスカレートしてきて

今日はコスプレしたまま胸の谷間を出した写真まで撮ってしまった。

そして変わったのはポーズだけでは無い。最初はすっぴんで撮っていたけれど、ネットに上がっている榛名コスプレのコスプレイヤーたちは皆きちんと化粧をしているので私もそれに対抗してきちんとメイクをするようになっていた。

「そういえばこれ、ネットに載せたらどうなるかな……？」

彼もあんなに喜んでくれるし、我ながら自分の榛名コスプレは良く出来ていると思っている。いまネットに上がっている榛名コスプレイヤーたちの大半よりは良く出来ているのではないだろうか。

学校のクラスメイトにはコスプレをしているとは言っていない。眼鏡を外しているし学校ではしていない化粧もきちんとしている。彼ですらだいぶ印象が変わったと驚いていたので、コスプレ写真なら私だとはバレることはないだろう。

艦これを始めてから私はTwitterに艦これ専用のアカウントを作っていた。日常のことを呟いたり友人とやりとりしたりするアカウントとは別に、艦これのイラストを描いている絵師さんをフォローしたり、攻略の話をしたりするためのアカウントだ。

彼は教えてくれなかったけれど、本当は艦これは十八歳未満はプレイしてはいけないそうだ。

なので女子高生としての私のTwitterで艦これの話をするのははばかられたので、そのために別けたアカウントがこれだった。

ちょうどこれなら榛名のコスプレを投稿するのにもってこいだろう。

『榛名のコスプレしてみました』っと」

無難なポーズを取っているもので最も映りの良い写真を選んで投稿してみる。とたんにお気に入りとリツイートの通知でスマホがぶるぶると震え出す。

『かわいい!!』『似合ってるねー』『胸すごい大きいね、何カップ？』『もっと写真見せてよ』

瞬く間に増えていくお気に入りとリツイートの数。とても返事をしきれないくらいの沢山の返信。

予想以上の反応に私は気をよくしてもう何枚か榛名コスプレの写真を投稿してみる。さらに激しくなるお気に入りとリツイートに私はスマホの通知機能を切る。

艦これコスプレは人気があるのでTwitterをやっていてもしょっちゅう写真が流れてきた。その中には榛名のコスプレもよく混じっていた。

彼がパソコンにため込んでいた中にもTwitterに投稿された写真が含まれていた。その中に自分の写真が混じるのかと思うと、私はなんだか勝ち誇った気分になるのだった。

＊

「春菜、こんどの日曜に東京で艦これのイベントがあるんだけど行ってみない？」

金曜日、いつもの帰り道。いきなりの彼の誘いに私は目をぱちくりする。

ここしばらくは週末のデートと言えば専ら彼の家に呼ばれて一日中セックスしているだけの、デートとも言えないものばかりだった。

彼の両親が家を空けている週末だけ呼ばれて、そうでないときは二人で会うこともなくなっていた。久しぶりの彼からの遊びの誘いに私の心は浮き立つ。

「コスプレ衣装あるだろ？　あれを着てさ」

「えー、でも……」

榛名のコスプレしてるとこ、生で見てみたいんだよ」

前々からずっと、目の前でコスプレして欲しいと言われていた。イベントで一緒にデートできるのなら……と私の心がコスプレをするほうに傾いてゆく。

「榛名、頼むよー」

情けなく頼む彼は土下座してきそうな勢いになる。あまりの懇願になんだか可哀想になり、私はコスプレ

でイベントに一緒で参加することを受け入れたのだった。

そして訪れる週末。

駅で彼を待ち合わせた私は、榛名コスプレの衣装の入ったバッグを抱えて電車に乗り込む。

東京のイベント会場まで電車で一時間。こんな大移動も彼と二人なら平気だ。

久しぶりのおでかけデートの私の頃は浮き立ち、肩から提げた衣装を収めたバッグの重みも心地よい。

「沖ノ島海域　難しいよなー　まだ抜けられねえ」

「私、カスダマ沖まで行ったよ」

「マジかよ。春菜、早いな」

相変わらず頑なに自分のこだわりばかりに執着する彼の艦これの進捗ははかばかしくなかった。ネットの攻略情報を参考にしたらとなんども勧めたが、私の言うことに耳を貸さないのでもうあきらめてしまった。

そんな彼も先日ようやく『榛名』を手に入れたようで、その時の喜びようと言ったらなかった。

電車で一時間ほどかかって到着したイベント会場は大盛況だった。開場時刻から少し遅れていったのに入場するまでしばらく列に並ぶ必要があったくらいだ。

「じゃあ、着替えてくるから」

彼を更衣室の前で待たせて着替えに向かう。パーツの多い金剛型の衣装は慣れないと着るのに苦労するが、部屋でなんども着替えている私はあっという間に着込んでしまう。周りの他のコスプレイヤーたちと違って髪の毛はウィッグいらずなのも楽だった。

最後に更衣室の片隅にある姿見で全身をチェックする。今日も完璧な榛名の姿がそこにはあった。

更衣室から出て彼の元に駆け寄る。スマホを弄っていた彼は顔を上げて私の姿に目を留め、口をぽかんと開けて絶句する。

「どう？　似合ってる？」

「すげえな、写真の十倍くらい可愛い。最高だよ春菜」

彼の褒め言葉に私は鼻を高くする。

それでさあ、俺、――に並ばなきゃいけなくなった

んだ。春菜はそのへんで待っててよ」
「えっ……　一緒に回るのは？」
「先輩から買ってくるように頼まれてさあ。あとで時間が出来たら、一緒にな」
彼が顎をしゃくって示したのはイベントホールの壁際にあるサークルだった。とても人気らしいそこは長々とした行列が出来ていて、列の終わりはホールのどのあたりにあるのか一目ではわからないくらいだった。
「いろいろ世話になってる先輩だからさあ、断るわけには行かないんだよね。頼む、春菜」
「私は別に良いけど……」
こうなってしまったときの彼には何を言っても無駄なのはこれまでの付き合いで判っていた。私がうなずくと彼は足早に去ってしまい、その場に一人で取り残される。
「はあ……」
どうすれば良いか判らなくなった私はとりあえず周りに広がる同人誌を売っているスペースを見て回ることにした。
男性向けの肌色の多い同人誌がたくさん並んでいるのに圧倒されながら、私はいくつかのサークルで見本を手にとって読んでみる。
十八禁の同人誌を手に取るのに最初はびくびくしていたけれど、なんども繰り返すうちに慣れてしまう。コスプレをして濃いめの化粧をしているので私を高校生だとわかる人は居ないはずだ。
しばらくそうしてみて驚いたのは榛名コスプレの効果だった。男の絵師さんのところに買いに行くと決まって私を見て目を丸くしていて、何人かからは写真を撮って良いかと言われたのでスペースの前でポーズを取った。
同人誌でなくグッズを売っているところがあったので通学鞄に付けるための小さなピンズを買う。私の榛名コスプレを褒めてくれたそのスペースの人はおまけに一つ無料で付けてくれた。

金剛型の同人誌が沢山あるエリアで私は榛名の同人誌を見て回る。可愛い榛名の絵を描く絵師さんの同人誌を私は何冊か買い、スペースで声をかけられて艦これトークを弾ませる。

初対面の人たちから話しかけられるのは最初は怖かったけれど、艦これという共通の話題があるので途中から楽しくなった。

気が付けば私は、彼から一人で放って置かれていることも気にならなくなっていた。

「目線、こっちにちょうだい!!」

「カウント行きまーす。一、二、三……　はい、解散!!」

同人誌のエリアを抜けた私は、ホールの中の広くスペースが取られているあたりに足を踏み入れた。どうやらここはコスプレイヤーがカメラマン達から撮影されるためにあるスペースのようだ。

「すいません、撮影させてもらって良いですか？」

「え、私ですか？」

ネットで見かけたコスプレ写真はこういう風に撮影されていたのか、と感心しながら周りを見回し歩いていたところで私に声が掛かる。戸惑いながら了解すると、声をかけてきたカメラマンは私に向かって大きなカメラを向けた。

「すいません、撮らせてくださーい」

撮影お願いしまーす」

最初は一人に撮られていたのが瞬く間に私の周りにカメラマン達が集まってきて十数人の輪が出来る。周り中から声がかけられるのに合わせて視線をあちこちに送る。カメラの列に向かってぎこちなく微笑むとフラッシュが次々とたかれる。

最初はほとんど棒立ちで撮られるがままだったが、周りで私と同じように囲み撮影されているコスプレイヤーたちを横目で眺めて見ようみまねでをポーズを作ってみる。軽く前屈みになってみたり、下着が見えない程度にスカートを持ち上げるだけで私を囲む輪はさらに大きくなっていった。

人並み外れて大きい胸があるから私は良くも悪くも

男性からの性欲を込めた視線には慣れっこにさせられている。

視線だけで済めばまだ良い。バスや電車に乗れば軽い痴漢はしょっちゅうだし、ひどいときなど道ですれ違いざまに胸を触っていこうとする男の人までいる。

彼と付き合いだしてから二人でいればそういう男の人を避けることが出来た。なので私は毎日セックスばかり求められて退屈しても彼から離れなかった。

「次、撮影おねがいしまーす」

次々をやってくるカメラマン達に向かって私はポーズをとる。囲まれているので周り中からの視線が私の身体をなめ回しているのがわかる。だが、ある程度の近さより距離を詰めてくる者は誰も居ない。

私が姿勢を変えるのに合わせて囲んでいるカメラマン全員の視線が動く。そうして私は、唐突に理解する。

この場所を支配しているのは、私だ。

コスプレイヤーとカメラマンの間にある絶対的な壁を、私は一度のイベントにして理解していた。

コスプレしてこうしていれば、私は、自分自身の価値に、自分で値段が付けられる。普段着でただ街を歩いているだけで胸をじろじろと品定めされる日常生活とは逆に、ここでは私が自分からみんなに品定めさせている。それも、安全に。

もしここで誰かが私の身体を触ったりしたらすぐにイベントのスタッフが飛んできてお縄になるだろう。周りを囲んでいるカメラマン達を一瞥する。知った顔が混じっていたような気がしてそちらに顔を向けると、彼がカメラマン達に混じってスマホを私に向けて写真を撮っていた。

彼に視線を合わせてウィンクする。私が誰にウィンクしたのかわかっていないだろうカメラマン達が一斉にシャッターを切った。

「はい、いったん解散してくださいねー」

私を囲む輪が大きくなりすぎ、やってきたスタッフ

に散らされる。ちょうど良いタイミングだとばかりに私は彼の元に駆け寄った。
「先輩から頼まれていた本、買えた？」
「ああ。ずいぶん並んだよ……」
「じゃあ、これから二人で回ろうよ」
ようやく彼も戻ってきてくれたし、ここからは二人の時間だ。会場を一人で歩いているあいだ、仲睦まじく手を繋いで歩いているコスプレイヤーの女性と私服の男性のカップルを何組も目にした。ああいうのを私もやってみたい。
だが彼の口から出た返事は、私の全く予期していなかったものだった。
「春菜、これから俺の家に来れる？」

＊

せっかく東京まで来たのだから他にもいろいろ寄りして遊んでいきたかったのに、イベントの終了を待ずして私は彼に連れられて東京を離れていた。
そして行く先はいつもの平日の学校帰りと同じ、両親のいない彼の家だ。
「春菜、今日はコスプレしてヤってよ」
「コスプレ、して……？」
ほら、今日は榛名の衣装を持ってきてるだろ。それ着てしようぜ」
足下の床に置いている榛名コスプレの荷物を彼が指差す。これを着てって、榛名の格好をしてセックスする
ってこと……？
知識としてそういうものがあるのは知っている。だけどいままでの彼とのセックスでそういう行為をしたことは一度も無かった。
お互いに健康な高校生同士だから衣装の力など借りなくても欲情できるし、大人がやりたがる制服セック

スなど毎日制服姿の私たちには特に面白みも無い。
「汗かいちゃうし、汚れるかも」
「それって洗濯できる素材だろ？　一回だけでいいからさあ」
こうなってしまったときの彼はもうどうしようもない。私はため息をつきながら榛名のコスプレ衣装の荷物に手を伸ばす。
せっかく二人で一緒にイベントに行って遊べると思ったからコスプレも持参したのに、結局はこうなってしまうのか。
これならひとりで行った方が良かったかもしれない。そうしたらもっと艦これの同人誌を出している絵師さん達と話が出来たし、カメラマン達に写真を撮られることも出来た。
……ひとりで行った方が良かった？
心の中に浮かんだ発想を押しとどめる。せっかく彼が誘ってくれて一緒にイベントに行けたんだ、もっと感謝しないと。
榛名の衣装に着替えて彼の前に立つ。彼の希望でブラも下着も着けていないのでなんだか居心地が悪い。
「春菜、おいで」
「うん……」
おずおずと椅子に座った彼に近づくと、彼の手が私の胸を衣装の上からなで回す。。
胸元の合わせ目を割って入ってきた彼の手が私の乳房を強く揉みしだき、私は痛みに小さく声を漏らす。
「脱がすよ」
私が返事をする間もなく彼は上着を脱がしていく。袖は取らないで上着だけをはだけたので中途半端に胸だけが露出した形になる。
着ている方からすると変な感じだったが、半脱ぎがかえって良かったのか興奮して鼻息を荒くした彼は私の乳首にむしゃぶりつく。
「はあっ　んぅっ……」
「春菜、かわいいよ」
乳首を舐めると同時に彼の手がスカートをめくり上

げて私の秘所に伸びる。ぎこちなく私のクリトリスを刺激する彼の指に、私は少し濡れ始めてきた自分を感じる。

このまま、そうしてゆっくり前戯をしてくれれば。そう思う私を、しかし彼は裏切る。

「じゃあ、そろそろ……」

もっと触って、舐めて、ほぐして欲しかったのに。少しだけの前戯で私はベッドに押し倒される。

上半身の衣装はすっかりはだけて胸が丸見えになり腕に引っかかっているだけだ。スカートもめくれ上がって彼の前に私の秘所がむき出しになっている。

「入れるよ、はるな」

ペニスを隆々と勃起させた彼が私に覆い被さってくる。なんだかいつもよりも彼のモノは大きくなっているように思えた。

普段から彼はあまり前戯をしてくれなかったが、興奮しすぎて余裕が無いのか今日はいつにもまして短かった。ほとんど濡れていないところにペニスをねじ込まれて私は苦痛のうめきを上げる。

のしかかってくる彼を押しとどめようと腕を上げようにも、両腕とも彼にがっちりと押さえつけられている。

鼻息を荒くした彼は私の表情にも気づかず、好き勝手なペースでペニスを出し入れしていく。

「はるな……　はるなっ」

彼がうわごとのように私の名前を呼びながらペニスを突き入れてくる。

いや、本当にこれは私の名前だろうか？

「はるなっ!!　良いよ、最高だ……」

彼が抱いているのは私？　それとも『榛名』？

答えの出ない疑問に頭の中がぐるぐるする。その間も彼はペニスで私の身体を貫き続け、断続的に与えられる痛みに私は涙を流す。

「うあっ……　出すよっ　はるなっ!!」

胸に出したり顔にかけたりして衣装を精液で汚されたらどうしようかと思ったが、彼も流石にそこまで考

え無しではなかったようだ。コンドームの中に注がれた精液の熱を私は上の空で感じていた。

だからだろうか。その日、私は家に帰ってから榛名コスプレの写真を彼に送らなかった。

＊

榛名コスプレで求められたあの日から私は彼を避けるようになった。

いちど平日の帰り道で会うのを止めてみると、なんとなく再開するのがおっくうになってしまった。

彼からのLINEの未読も無視したまま貯まっているのが何件になるかわからない。

付き合い始めたばかりの頃はこんな思いになどならなかった。あの頃の彼は優しく私をエスコートしてくれたし、セックス以外の楽しみもたくさんあった。

彼を会うのを止めて空いた時間を私はよりいっそうコスプレに注ぎ込むようになった。最初に買った春菜の衣装は目が肥えてから見てみると中古ゆえの古びたところが目立ってきたので、新しくより高額なものを改めて買い直した。

衣装の細かいところを手直ししたり修繕したりするため、中学校の家庭科の授業で少しやっただけだった縫い物の練習も始めた。

凝り出すとかかるお金が青天井なのはコスプレも他の趣味も同じだ。お小遣いだけではどうにもならなくなってきたので私は放課後に軽くアルバイトを始めたりもした。

もともと平日の学校帰りも休日もほとんどの余暇を彼のために使っていたので、それが無くなった私にはありあまる時間があった。

そうしてなんどもイベントに参加したりして活動を続けていくと知り合いも増え、彼なしに一人でイベントに参加する事への寂しさはどこにもなくなった。

今日はそうして誘われたとある艦これの同人誌即売会のアフター打ち上げだ。

「ふふ、またこんなに広がっちゃった」

同人作家とコスプレイヤーの十数人が乾杯待ちの会話に興じる居酒屋の片隅で、スマホでTwitterを開いた私は自分の投稿を見返してほくそ笑む。

コスプレした姿をTwitterに投稿するのはいつしか私の習慣になっていた。投稿するたびにお気に入りとリツイートされる数は増えていき、いまでは毎回数百を超えるのもざらだ。部屋で自撮りしたものでなく、今日のようにイベントでのコスプレ姿もせっせと投稿している。

だが自分のスマホを使った自撮りではどうしても限界はある。自分用にデジカメを買ってみようかとも思ったが、写真撮影はコスプレと同じくらい――いや、それ以上に奥が深くお金も掛かる趣味だ。

恵まれた自分の容姿やスタイルをそのまま生かせるコスプレと違って、経験のない私に一から写真の練習をする余裕はなかった。

スマホにメールの着信通知が表示される。自分の写真のお気に入りとリツイートが増えていくのを眺めるのを止めてメールを開くと、先週のイベントで私を撮影したカメラマン達の一人からの連絡だった。

写真が出来上がった旨を伝えるメッセージと共に示されたサンプルの数枚を開くと綺麗にレタッチされた私の榛名コスプレ写真が現れる。

「あら、綺麗に撮ってもらってるじゃない」

「そう思います？　このカメラマンさん、一番早くてこんなに綺麗に現像してくれたし、次のイベントでも撮影を頼んじゃおうかな……？」

「名前はなんていう人？」

隣に座っていた艦これコスプレイヤーの先輩、陸奥レイヤーの女性が私のスマホに表示された榛名コスプレの写真を認めて話しかけてくる。私がカメラマンの名前を応えると、先輩は納得した面持ちで深くうなずく。どうやら界隈でも有名な人らしかった。

コスプレのイベントに出て沢山のカメラマン達から撮影されるようになって判ったことは、彼らがずいぶんと玉石混交だということだった。

あいさつ無しにいきなりカメラを向けてきて撮影を始めたり、撮ったきり梨のつぶてで写真を渡してくれなかったり。

会場で無理やりパンチラさせるようなポーズを要求してくるような悪質な者も混じっていた。

もちろん丈の短い衣装を着るときには見えてしまっても良いように見せパンを履いていくに決まっているが、不可抗力で見えてしまったりこちらから意図的に見せようとしていないのに強要してくるのはセクハラにもほどがある。

とはいえ、コスプレをしていない女子高生としての私が遭遇する変質者や痴漢達に比べれば悪質なカメコ達など可愛いものだという思いもある。イベント会場で何かあったときはスタッフに言えばすぐに対応してもらえるし、本当に酷いカメコはおおかたのイベント出入禁止にされていた。

代わりに綺麗に撮ってくれてこちらの意図を汲んでくれる腕の良いカメラマンには、こちらから撮影してくれるようにお願いしているくらいだ。

コスプレの世界では女性コスプレイヤーの立場は圧倒的に上だ。まず男女比からして及びもつかない。

ただの女子高生としての私はただ男たちの欲望を受け止める事しかできなかった。思い起こせば幼馴染みの彼との関係もまさにそれだった。

だけどコスプレイヤーとしての私は、どう見られるかをこちらの意志でコントロールできる。

「じゃあ、全員揃ったし……　そろそろ乾杯といきますか」

上座に座った感じの男――艦これジャンルでは名の知れた大手同人作家だ――の声にその場の全員がグラスを手に取る。私も遅れず目の前に置かれたサワーのジョッキを掲げる。

「「乾杯!!」」

艦これは十八歳未満がプレイできないので初めから私は高校生だということを隠してコスプレをしていた。そのうちに周りからは成人しているものと扱われるようになったので、それを否定せずに二十歳だということにしていた。

私のこのプロポーションで高校生だと思う方が無理があるだろう。こうして打ち上げなどにも顔を出せるし、成人していることにしていた方が何かと便利だった。

「春菜さん、今日のコスも良かったですよー」

「本当ですかあ？　ありがとうございます!!」

「うちのサークルがあんな忙しくなかったら、写真撮らせてもらいたかったですよ」

乾杯からしばらくしたところで今日の幹事である同人作家の男がやってきたのであいさつをする。

彼の描く艦これの漫画は、深いストーリー性とキャラクター理解に史実へのリスペクトを兼ね備え、それでいながらも艶めかしくエロいという素晴らしいものだった。

イベントに参加し始めた頃はただの買い手だった相手とこうして会話できることの嬉しさに私は震える。

「次の砲雷撃戦の新刊、榛名本にしようと思ってるんですけど……　もし良かったら、うちの売り子してくれ……え、私ですか？　はい、喜んで!!」

売り子の依頼などされたのは初めてだったので私は思わず舞い上がってしまう。しかもそれが自分が好きな本を描いている同人作家ならなおさらだ。

こちらからはお返しとばかりに今回のイベントでの新刊の感想を伝えると、女性からエロ同人誌の感想を言われるのに慣れていないのか幹事の彼はしきりと恥ずかしそうにしていた。

そうしてしばらく私と会話をしてから、幹事の彼は次に移っていく。

「あらまあ、大人気じゃない」

「私なんてまだまだですよー」

私たちのやりとりを眺めていた隣席の先輩の陸奥レイヤーにからかわれる。すでに人気レイヤーとしての地位を確立し、売り子やら写真集やらで引きも切らぬ人気の彼女の前には私などまだまだひよっこだ。

「彼、ああ見えてアッチの方もやり手だから……　火遊びには気をつけるのよ？」

「私も子供じゃないですから……」

二人でグラスをあおり、女同士の共感に満ちた笑みをお互いに交わす。

私がコスプレイヤーとしてそれなりに人気が出て、知り合いが増えていろいろな所に顔を出すようになって知ったのはこういう世界にも男女のあれこれはあるという事だった。

それ自体は別に構わない。男と女がいればどんな世界だって起きることだ。

それにただの女子高生でなく、人気の榛名コスプレイヤー『春菜』としての立場がある私はそれだけで強い立場にあった。ここでの私は、女子高生としての私を毎日のように性のはけ口にしていた幼馴染みの彼のような者に捕まるようなか弱い存在ではないのだ。男性の同人作家やカメラマンから打ち上げの席などで口説かれたことはなんどかあったが、正直なところ特定の誰かのモノにされるのはもう懲り懲りだという思いもあり今のところ私はみな断っていた。

「あ、そういえば春菜さん、来月にあたしの知り合いを集めて艦これ大型コスプレ合わせがあるんだけど、貴女も参加するかしら？」

「もちろんです、私で良ければ!!」

「ありがと。ちょうど金剛型が榛名だけ揃っていなかったのよね。助かるわ」

「どこのスタジオでやるんですか？」

陸奥レイヤーの先輩から誘われた大型合わせの話で私と彼女は盛りあがる。

周りの同人作家やコスプレイヤーたちもそれぞれに楽しんでいる。お互いの作品に対する感想が交わされ、与太話で馬鹿笑いし、これからの展望についての

会話が繰り広げられる。
そうして、打ち上げの夜は更けていった。

「お先に失礼しますー!!」
終わりまで参加したいのは山々だったが余りに遅くなるとさすがに両親も怪しむ。私は一次会の途中で抜け出して駅へと向かう。
ほろ酔いの火照った肌に夜風が気持ちよい。
今夜の打ち上げでもまた沢山のコスプレイヤーや同人作家たちと出会って盛りあがることが出来た。いずれも劣らぬ艦これへの熱情と、何かを作り上げる者特有の情熱に満ちた者たち。
人気の榛名コスプレイヤー『春菜』としてその輪に混じれることを私は心の底から嬉しく思う。
『榛名』として求められるなら、『榛名』の自分を売りつけてやればいい。

その意味で幼馴染みの彼は、売りつけるに値しない相手だった。今となってはそう思う。
駅で電車を待ちながらスマホを取り出すと、幼馴染みの彼からのLINEの未読がまた増えていた。
意識していなかったが、今日であの日――初めて榛名コスプレでイベントに参加し、そのまま榛名コスプレで彼に求められた日から三ヶ月が経っていた。

「……さよなら」

意を決してなんとなく残していた彼の連絡先を消す。LINEもTwitterもブロックし、電話は着信拒否にする。アルコールで衝動的になっているがままに、私は幼馴染みの彼との繋がりを一気に断ち切る。
艦これを教えてくれたこと、榛名と出会わせてくれたことには感謝している。それが別れのきっかけにな

るとはまさか彼は思いもしなかっただろうけど。
彼との日々を思い返す。私は彼の恋人では無くて、ただ彼の欲望を受け止めて処理するだけの肉人形だったのかもしれない。
儚く消えた初恋に、私は少しだけ涙を流した。

＊＊＊＊　一年後　＊＊＊＊

あれからずっと、私には特定の彼氏はいない。人気のコスプレイヤーとして活動していく過程で何度もあった口説きは全て断っていた。
だからといって、色っぽい出来事が何もないというわけでもない。
今の立場をさらに押し上げてもらえるように様々な協力を取り付けるにあたり、軽い枕営業のようなことは何度か行っていた。
最初は少し躊躇いもあったけれど、いつしか女としての自分の武器を使わないでどうすると吹っ切れるようになった。私以外だってみんなやっていることだ。
それに、幼馴染みの彼との関係のように一方的に求められるのと、私自身の意志で主体的に決めるのでは行為は似ていてもずいぶんと違う。
飲み会でこっそり抱きついて胸を押し当ててみたり、流出させないのを条件に際どい写真を撮らせてあげたり、誰にも言わないことを条件にフェラしてあげり。セックスまでは許さないというのが私なりに引いた一線だった。
そうしているときにカメラマンの一人として出会ったのが彼――サイトウさんだ。
「春菜ちゃん、いま何か別のこと考えてたでしょ？」
ぷはぁっ　やだ、そんなことないですよお」
胸でペニスを挟みながら先端を加えて舌で刺激していた私はいったん顔を上げ、サイトウさんに向かって微笑む。
サイトウさんの撮影の腕はそれまでに出会ったどの

カメラマンよりも桁違いに上だった。彼の協力を得て発行した写真集はコスプレイヤーとして活動し始めて一番の売上を記録した。

ROM撮影に協力してもらった流れで彼に抱かれて、そうしていま私はこうしている。

「うぉっ……　それいいね……　春菜ちゃん、ほんとエッチが上手だよね」

「ふふっ　ありがとうございます」

自慢の大きな胸を両手で押さえてペニス全体を包んでしごき上げると、サイトウさんはうめき声を上げて気持ちよさそうにする。

幼馴染みの彼にさんざん求められていたおかげで私の性的なテクニックはずいぶんと上達していて、同年代の女の子の中では負け無しというのがサイトウさんの言葉だ。なんだか淫乱だと言われているようで心苦しかったが、サイトウさんとのセックスを繰り返すうちに私はそれを渋々ながら認めていた。

なにより幼馴染みの彼と違って、サイトウさんはきちんと私が気持ちよくなるまでしてくれる。一方通行でなくお互いに快感を与え合うセックスがどんなに気持ち良いものか、私はサイトウさんとの行為を通じて思い知っていた。

「春菜ちゃん、そろそろ……」

「はい……」

なんども肌を重ねたおかげでお互いに次に何をしたがっているか言葉を交わさなくともわかる。

パイズリをやめた私は彼の上にまたがり、騎乗位で挿入して再びペニスから与えられる快楽をむさぼる。

私は身体を提供し、サイトウさんは私がコスプレイヤーとしてのし上がるのに協力する。

そしてお互いに気持ちよくなる。

これで、いいんだ。

快感に真っ白になる頭のなかで、私はそう思った。

第２章

カメコおじさんと春菜、露出ポトレ撮影の休日

「お待たせしましたー!!」
いつもの待ち合わせ場所に、いつものように小走りで彼女――春菜がやってくる。
ウィッグいらずの艶やかな黒髪ロングを振り乱してやってきた彼女は、こちらの元で立ち止まると肩で息をする。
「すいません、衣装の準備が無くて良いと思って気を抜いてたら遅くなっちゃって……」
「ああ、大丈夫。こっちもさっき着いたばかりだから」
今まで何度も繰り返してきた春菜との待ち合わせ。だが今日がいつもと違うのは……この格好のまま、撮影に移ることだ。
これまではスタジオや高級シティーホテル、場合によってはグレードの高いラブホテルに移動しての撮影が主だった。
そうして撮影しているうちに気づいた。
コスプレ衣装とコスプレイヤー特有の濃いめのメイクが生み出す人工の美人ではない、彼女は本物の素材だった。過去に撮影してきたそこらの『美人コスプレイヤー』たちとはものが違う。
そんな彼女の素の状態をそのものを撮影してみたいと思うのは、カメラマンなら誰しも抱く感情なのではないだろうか。
撮影の前に軽く食べていこうか。いつもの所で良い？」
「はい、ご馳走になりますー」
にこにこと微笑みながら、まったく自分で払う気のない春菜に苦笑する。
食事代からロケ地への足代、スタジオのレンタル代に、果ては衣装の製作のためのもろもろまで。春菜のコスプレ活動を支える資金面を専ら支えているのは自分だ。
もちろんこれは単なる施しなどでは全くない。それこれも春菜からあの見返りを約束されてからだ。
隣を歩く春菜に目をやる。
ひときわ目立つブラウスを押し上げる大きな胸が彼

女の歩幅に合わせて揺れる。ミニスカートから伸びるニーソックスに包まれた脚の、わずかに覗く肌の白さがまぶしい。

『榛名』のコスプレ衣装を着崩して喘ぐ春菜の姿が脳裏に浮かぶ。

「サイトウさん、どうかしました？」

こちらの視線に気が付いた春菜が小首を傾げる。

ほとんどノーメイクでも人並み以上の美少女の彼女の顔へ精液を放ったことは数知れない。

「いや、なんでも無いよ」

なにより、これで現役の女子高生なのだ。この瑞々しい肌を思うように蹂躙できるなら、幾らでもコスプレ活動の費用を負担してやろうではないか。

「それで今日は衣装を持ってこなくていいって話でしたけど……　サイトウさんが新しく用意してるんですか？　それともこれから買うとか？」

「いや、その格好のままで良いよ」

食事を終えて一息ついたところで訊ねてくる春菜にコスプレ衣装にはならないと返すと、ぽかんとした様子で彼女は目を見開いた。

「この格好って、これ、ただの私服ですよ？」

「それでいいんだよ。春菜ちゃん、私服でも十分可愛いから」

戸惑うように眉を寄せる春菜。

出会ってからずっとコスプレ姿ばかり撮影していた。ひょんな事からそれ以上の関係――ハメ撮りまでさせてもらえるようになったが、それすらあくまでもコスプレが前提だった。

いつか春菜、彼女そのものを被写体にしたいと思っていた。ちょうど今は特にイベント向けの準備もない時期だ。

「春菜ちゃんそのものを、撮影してみたいんだよ」

重ねて告げると春菜の瞳が揺れる。視線を外してうつむいたあとで、彼女はゆっくりとうなずいた。

＊

海からの風が春菜の髪をゆらす。顔にかかった黒髪を片手でかきあげるところでシャッターを切る。
来客の多いイベントが無いときのビッグサイトの近くは、コミケの時の混雑を知っているものからは嘘のように人影がない。
海辺の歩道を歩く春菜の数歩後でカメラを構え、彼女の表情を切り取る。
「あとで水上バスにも乗ってみようか？」
「ほんとですか？　私、乗ったこと無いんですよー」
水上バスが春菜の後ろを通り過ぎていくタイミングを計って写真を撮った後で提案すると春菜は嬉しそうな声を上げる。
コスプレ衣装でない私服での撮影に最初は戸惑っていたものの、カメラを向けられシャッター音を聞くとそれなりのポージングを決めるのはさすが人気コスプレイヤーと言うべきか。
しばらく水路沿いを歩きながら撮影を続けていく間にお互いの間の緊張もほぐれ、いつものコスプレ撮影と変わらない雰囲気を出せるようになってきていた。
「春菜ちゃん、だいぶ歩いたし疲れたでしょ？　そろそろ休もうか」
「はい、ありがとうございますー」
ちょうど良いところで道端にベンチがあったので春菜を促して座らせる。
今日は榛名の学校が創立記念日ということで平日なので休日だった。滅多に出来ない平日の昼間に女子高生である榛名を撮影するチャンスを得て思いついたのがこの私服ポトレ撮影だった。
平日の昼間なので辺りには人影もまばらだ。撮影をしている間もほとんど通行人には会わなかった。もっとも、その方がこちらとしては好都合なのだが。
「春菜に続いてベンチに腰を下ろす。
「春菜ちゃん、学校はどう？」
「まだ二年生ですから大したことないですねえ」

「来年はどうするの？　受験？」
「うーん、迷ってます。さすがにコスプレは仕事には出来ないし……」
　他愛のない会話を続けながら少し離れたところにある隣のベンチに目を向けてみると、学校をさぼったのか制服姿の高校生のカップルが座っている。ぴったりと寄り添った二人はイヤホンを分け合って音楽を聴いていた。
「良いですねー、ああいうの。漫画みたい。」
「なに、春菜ちゃんも、彼氏とああいうことしてみたかったりするの？」
「そりゃあ私だって、女の子ですよ」
　こちらの視線の先に気が付いた春菜が話しかけてくる。それきり会話が止まり、こぶし二つ分だけ空いたベンチでの春菜との距離に今さらながら気づく。
　隣のベンチの高校生カップルはこちらのことなど全く気にかけずに二人だけの世界に入っている。ぴったりと身体を寄せて手を握り合い二つのイヤホンを分け合っている彼らと、自分と春菜との差を途端に感じる。
　何気ない素振りを装ってベンチでの春菜との間の距離を詰めようと軽く腰を上げると同時に春菜も立ち上がる。
「あ!!　サイトウさん、そろそろ水上バスの時間じゃないですか？」
「……そうだな」
　まさか気づかれていたのか？　楽しげに歩き出す春菜の横顔からは、彼女の考えはうかがい知れなかった。
「わぁー　すごいですね」
　動き出した水上バスの後部デッキで身を乗り出した春菜がはしゃぐ。平日のこの時間の水上バスの乗客は少なく、一緒に乗ってきた乗客たちはみな前部の座席へ行ってしまったのでデッキに居るのは自分たち二人

だけだ。
埠頭から離れた水上バスが次第に速度を上げるとデッキに海風が吹き込む。
水面に反射した太陽の光がデッキから外を眺める春菜の横顔を照らす。スクリューが巻き上げる水しぶきを顔に浴び、可愛らしい悲鳴を春菜が上げる。
高校生カップルのせいで妙な雰囲気になってしまったが、水上バスの新鮮さでそれも払拭されたはずだ。
他の客が居ないのを良いことにデッキを広く使って春菜の姿をカメラに捉える。初めはきゃあきゃあ言いながらこちらを気にせずデッキから海を眺めてばかりだった春菜も、しばらくして落ち着くとこちらに向かってポーズを取る。
「こんな感じで良いですか？」
「そうそう、いいよー　春菜ちゃん」
照明の無いデッキから、太陽に照らされた船の外の水面を背景に撮ると思いっきり逆光になるがここが腕の見せ所だ。
狭い水路を抜けた所で突風がデッキを吹き抜ける。
「きゃっ」
突風で思いっきり巻き上げられる春菜のミニスカート。ちょうど良くシャッターを切るタイミングだったことで、カメラにはしっかりと彼女の下着が記録されてしまう。
思わずカメラを再生モードにして撮影した画像を確認する。黒いレースの飾りの付いた薄ピンク色の下着は、春菜が良く身につけているブランドのものだ。
「あーっ!!　いま、下着撮りましたよね？」
「このくらい今までだって撮ってきただろう」
「それはそうですけど……　今日のは違うって言うか……」
コスプレ姿でパンチラ撮影をすることはこれまでになんどもあった。その時々の都合で、春菜自身の下着で撮影したり、用意した下着――オタク受けの良いパンなど――を履かせて撮影することもあった。
そもそも一対一の個人撮影でなく不特定多数に撮影

させるイベントでも、榛名は見せパンのパンチラをさんざんカメコたちに撮影させている。

「一枚撮ったらもう何枚撮っても同じでしょ？　春菜ちゃん、このまま撮影させてよ」

「ほんとに変態なんだから……」

ため息をついた春菜はもう一度海へ向き帰る。

相変わらずデッキに居るのは自分たちだけだ。人目の無いのを良いことに動き回ってアングルを変える。

時折吹き込む海風が春菜のスカートをなんども巻き上げる。不規則にやってくるチャンスをすかさず捉え、もう数枚ほどパンチラを撮影することが出来た。

そうこうするうちに水上バスの航路は終わりに近づき、終着点の埠頭が見えてくる。

下船のためのタラップは水上バスの後部、デッキの横に付いている。船室から他の乗客たちが下船のためにデッキに出てくるのに合わせて、写真を撮るのを止めて春菜の隣に移る。

「どんな感じで撮れました？」

興味津々と言った様子の春菜にカメラを渡すと、さっそく彼女は再生モードにして写真をチェックしはじめる。

「わあ、綺麗……」

こうして船上で撮影したのは今日が初めてだ。コンディション的になかなか厳しいものはあったが上手く撮れたとは思う。それを裏付けるような春菜の反応にひとまずは胸をなで下ろす。

終着点の埠頭はもうすぐそこに見えているがここから意外に長いものだ。

デッキの端には座って海を眺めるための座席が設けられている。急いで下船する必要も無いので春菜とそこに腰掛けて船上で撮影した写真を再生していきながら着岸作業の終わるのを待つ。

「友達にクルーザー持ってる奴が居るんだよね。春菜ちゃん、次は海の上で艦これコスの撮影なんかどう？」

「素敵です!!　でも……　海の上だと衣装が潮風で傷

んじゃうかも」
「大丈夫、その時は新しいの買ってあげるから」
「本当ですか？　ありがとうございます……　あっ、これ」
順に写真を見ていくうちに先ほどの突風でのパンチラを捉えた写真が再生される。映し出された画像に見て春菜が口ごもる。
この後はしばらくパンチラを狙った写真ばかりが続いている。
コスプレ衣装でならさんざん見慣れたパンチラも、私服姿だと妙な生々しさがあった。
健全な写真を撮るのではなかったのか、素の春菜の姿を写真に収めるのが目的ではなかったのか。そうは思いつつも、内心でこうしたパンチラ――いや、それに留まらない露出写真をもっと撮影してみたい。そういった姿をしている春菜を見てみたいという欲望が次第に心の中に頭をもたげる。
ようやく埠頭に着岸した水上バスにタラップが渡され、先客たちが次々と下船してゆく。下船の列の一番最後に春菜と二人で並ぶ。
「春菜ちゃん、この後なんだけどもう少し撮影していかない？」
「いいですけど……　まだ撮るんですか？」
「この近くにポートレートを撮るのにいい公園があるんだよね。そこで続きをしようよ」
さっきみたいなパンチラをもう少し撮ってみたくなったのでね、と心の中だけで独りごちる。

＊

「こんな所で……？」
そう思うだろ？　それが、思ったより空いてるんだよ」
「ここは」
春菜を連れてやってきたのは東京タワーのふもと近くにある公園だった。オフィス街の真ん中にあるそこで、戸惑ったように春菜は周りを見回す。

公園の中を真っ直ぐに伸びるタイル敷きの遊歩道の向こうに東京タワーがそびえる。平日の昼間の公園は人影もまばらで、がらんとした子供向けの遊具が寂しさを誘う。

「じゃあ、はじめようか」

春菜を促して撮影を始める。まずはおとなしい普通のポートレートからだ。

最初は戸惑っていた春菜だったが、すぐに適応してうまくポーズを取り始める。

平日の午後、日が陰り出す前の公園はときおり散歩と思しき人が通り過ぎるほかは何の障害も無く、撮影にはもってこいだった。

遊歩道沿いのベンチに座らせ、カメラを向ける。

「そうそう、もう少し膝を立てて……」

「こうですか？」

周囲に人の居ないのを良いことに、ベンチの上で片脚を抱えた立て膝ポーズを撮らせて撮影する。写真ではうまい具合に下着は脚で隠れるようにしているが、撮影しているこちらには丸見えだ。

こういうポーズはコスプレ撮影の時にさんざんやってきているので春菜も慣れたものだった。

しばらく撮影したあとで子供向け遊歩道エリアに脚を向ける。

「わー、懐かしい。こういうの、私も子供の時によく遊びました」

滑り台に上らせて撮影すると春菜はあどけない歓声を上げた。

そうして少しずつ歩きで移動しながら撮影を続け、春菜に気づかれないように公園の中でも特に森が深いあたりへ彼女を誘う。

「じゃあ、春菜ちゃん。パンチラ撮ってみようか」

「本当にやるんですか？　ここ、外じゃないですか……」

誰も見てないって。大丈夫、ちょっとスカートを手で持ち上げるだけで良いから」

言葉巧みに春菜をなだめすかして露出へ持ってい

く。
根負けした春菜が両手で少しずつたくし上げていく。ニーソックスとスカートの間の太腿の見える面積が次第に大きくなり、ついに秘所を覆う薄ピンクの下着がスカートの下から現れる。
その様子をカメラを構えて連写する。春菜が立ち止まっているのを良いことに、近づいて下から煽りでスカートの中を撮影する。
その次には数歩あとずさり、広角で頬を赤らめて目をそらす春菜の顔と、たくし上げられたスカートの下から現れた下着、そこから伸びるニーソックスに包まれたすらりとした脚、その全てを写真に収める。
「やだ、恥ずかしいです」
コスプレ衣装でならこんなポーズはなんども撮影していた。だが今回は春菜がプライベートでも着ている私服で、しかもスタジオやホテルで無く野外だ。
かつて無いシチュエーションに対する興奮で自分が強烈に勃起しているのを感じる。コスプレ衣装を着ての撮影ならパンチラなど余裕、ハメ撮りだって何度もこなしている春菜も、私服でこうするのには慣れていないのか戸惑っている。
頬を赤らめ、目を泳がせる春菜の様子にますます興奮が募る。
次はそこの木に手をついて、お尻を突き出してみようか」
「はい……」
たくし上げパンチラをしばし撮影してから次のポーズに写る。こちらが何も言わなくても春菜は手頃な樹木に手をついて尻を突き出し、短いスカートではあっという間に下着があらわになってしまう。
後ろ側、春菜からは見えない位置に移動してあらわになって下着と尻をファインダーに収める。薄ピンクの下着、布地一枚の向こうの春菜のパイパンの秘所に思いを馳せながらシャッターを切る。
胸にばかり目が行きがちだが、張りのある春菜の尻もまが良いものであることを何度かのセックスを通じ

て知っている。
接写したついでに、つい出来心で軽く春菜の尻と秘所を撫でると彼女は可愛らしい喘ぎ声を上げる。
「ダメじゃないですか。きょうはポトレ撮影でしたよね？　モデルに触ったら捕まっちゃいますよ？」
「そんなこと言って、触って欲しくてそんなポーズしてるんでしょ？」
「さあ？　どうでしょうね？」
上気した表情で春菜は謎めいた微笑みを浮かべる。
コスプレ姿でならこんなものなど比でなく、それこそフェラチオの最中や挿入しながらでも写真を撮ってきている。だから春菜には、もっと大胆なポーズだってさせられるはずだ。
平日の午後、人影の無い公園の外れの森の中にシャッターの音と熱っぽい春菜の吐息だけが響く。
「パンツ、下ろしてみよっか」
林のさらに奥、周囲からの視線を遮れる木々の間に春菜を立たせて下着を下ろすように命じる。裾を気にしながらスカートの中に手を入れ、春菜は頬を赤らめながらおずおずと下着を下ろす。
太腿の所に下着を引っかけた状態の春菜を写真に収める。腕をどこへやったらよいか所在なさげにしていたのでスカートをたくし上げさせて、ギリギリ秘所が写らないくらいのスカートの高さで撮影する。
「もう……　外でこんな格好させるなんて、本当に変態なんですね。誰か来ちゃったらどうするんですか。サイトウさん、今度こそ破滅ですよ？」
この時間なら問題ないって。それに、春菜ちゃんも誰かに見られるの期待して興奮してるでしょ？　パンツ濡れてるよ」
「やだ、言わないでください」
太腿に引っかけたままになっている下着が濡れて光っているのを指摘すると春菜は恥ずかしそうに身をよじる。
秘所をバッチリ写してしまったらモザイクが必要になりコミケで売れなくなるので、ノーパンにして大事

なところは脚やスカートで隠すというのは過激なコスプレ写真を撮っているレイヤーなら一般的に使っているテクニックだ。

そういう撮影の際は前貼りで大事なところを隠して写真を撮るのが一般的だ。だが春菜と自分はいつもなにも付けずにノーパンそのままで撮影している。

その手の撮影で、いまファインダーの中で春菜がとっているノーパンたくし上げのポーズは定番のひとつだった。いつものROM撮影と違うのは、ここがスタジオでもホテルの一室でも無く、公共の公園だということ。

「そのままだとパンツ邪魔でしょ？　ほら、脱いじゃおうよ」

シャッターを切るのを止めて春菜に近寄り、太腿に引っかかっていた下着をおもむろに足首まで下げる。特に抵抗すること無く春菜は脚を抜いてくれたので、そのまま春菜の下着を取って自分のポケットにしまう。

「こんなに濡れていちゃもう一回はくのも気持ち悪いでしょ。持っててあげるからさ」

下着を着けたままの露出撮影の時点で春菜は濡れていたので下着には愛液の染みがじっとりと出来ていた。ノーパンが落ち着かないのか脚を閉じてもじもじさせながらも、春菜はそれ以上何も言ってこない。

どうやら彼女は思っていた以上に野外露出に適正がある娘のようだった。

「じゃあ次はもう少し明るいところで撮ろうか。春菜ちゃん、向こうの広場の辺りへ行こう」

「はい……」

頬を赤らめて伏し目がちにし、ミニスカートの裾をやたら気にしながら春菜がついてくる。

生け垣に囲まれた通路の真ん中に立たせて秘所が丸見えになるまでミニスカートをたくし上げさせて撮影する。

人影の少ないところでベンチに座らせて膝を抱えさせる。遠くから見たらただの体育座りのそのポーズ

も、ノーパンでやらせてカメラで接写すれば露出撮影の一環だ。

通行人がいないのをいいことに、公園のあちこちで春菜に露出させてその姿をカメラに収めていく。

一通り撮影できそうなポイントを全て回ったところで一息つき、カメラを再生モードにして写真を見返す。公共の場所であられもない姿をさらす春菜の写真ばかりが再生されるのを眺め、すっかり最初のもくろみとは違ってしまったと苦笑する。

お互いに気分が高まってしまい、これではとても普通のポートレートに戻るどころではない。これからどうしようか……と考えたところで春菜がすぐ近くにすり寄ってきているのに気が付く。

「サイトウさん、ここ、こんなに大きくしちゃって」

身をすり寄せた春菜がこちらの股間を触ってくる。撮影をしている間ずっとバキバキに勃起していたので、やはり気づかれていたか。

「このままノーパンで私を街で連れ回そうとか考えてるんでしょうけど、サイトウさんもこんなに勃起させたままじゃ人目のあるところに出られませんよね？」

ズボンの上から手慣れた手つきでこちらの股間を刺激しながら、春菜が小声でささやく。

「確かに春菜ちゃんの言うとおりだ……　なら、すっきりさせてもらわないとね」

ちょうど良いことに少し離れたところにあった公園付属の公衆トイレに向かって顎をしゃくると春菜もうなずく。この娘はトイレの存在に気が付いた上でこういう反応を返したきたのだろう。

どちらかから誘うでもなく自然に公衆トイレの方へ向かう。

幸運にも公衆トイレの中には誰も居ない。

春菜を手招きして呼び寄せて二人で男子トイレの個室に入る。鍵を閉めるとすぐに、春菜はこちらの股間をズボンの上からさすりだした。

「こんなに大きくしちゃって。私に露出させて、そんなに良かったですか？」

「ああ、最高だったよ春菜ちゃん。ほら、生で触って」
ズボンのファスナーを下げてペニスを取り出すと、春菜はいやな顔ひとつせず手で扱いてくれる。こちらの気持ちいいポイントを心得た的確な手の動きに、早くも情けない声を出してしまう。
ただ手を前後させるのでは無く、カリ首の部分を扱き上げるような春菜の手コキに射精感がこみ上げてくる。
「春菜ちゃん、手だけじゃ無くて、口でもお願い」
「もう、欲張りですねえ」
そう言いながらかがみ込んだ春菜は手を動かすのをいったん止めると、可愛らしく亀頭にキスをする。
ちらちらと舌を出して先走り汁を舐めとったあと、春菜は一気にこちらのペニスを口に含む。
すぼめた唇と、動き回る舌と、茎のぶぶんを扱き上げる指の組み合わせがもたらす強烈な快感にあっという間に耐えられなくなる。
「春菜ちゃん、出すよ……!!　飲んで……!!」

この後のことを考えると私服の春菜に顔射するのは不味い、そう考えるくらいの理性は残っていた。春菜の後頭部をつかんで頭を引き寄せて喉奥にまでペニスを突き立て、そのままの勢いで精液を放つ。
数日貯めた精液を放つ射精の勢いはなかなか収まらず、春菜はえづきながら喉奥で精子を受け止める。
ようやく射精が終わったところで手でつかんでいた春菜の頭を開放し、口からペニスを引き抜くと春菜は目をつぶって苦しそうにしながら口の中に貯めた精液を飲み込んだ。
「こほっ　かはっ　うぇ……　サイトウさん、濃すぎですよ……」
唇の端から溢れた精液を垂らしながら微笑む春菜に、また自分のモノは硬度を増していくのだった。

＊

「ちょっと動かないで……　はい、撮れた」

騎乗位の体勢でまたがった春菜の裸身を、お互いに繋がったままカメラに収める。なんどもシャッターを切っていると、繋がったまま春菜は器用にしなを作ってポーズを取る。

結局、公衆トイレでお互いに口と指で責め合うだけでは収まらず、公園のすぐ近くのホテルに二人でやってきていた。

春菜は夜には家に帰らなければいけないので宿泊では無く最大三時間のデイユースプラン。だが、露出ポトレ撮影を通じて気持ちが高ぶった二人にはそれで十分だった。

チェックインするや否や服を脱がずにまず一発。裸になって一緒にシャワーに入り汗を流すついでに愛撫しあったあと、ベッドで二回戦へ。

そうして今は二回戦の途中、春菜を上に載せて楽しんでいたところだった。

一通り写真を撮りおわってカメラを置き、空いた両手を春菜の胸に伸ばす。手の平に収まりきらないHカップの重みを味わいながら、小刻みに腰を動かして春菜の秘所を突き上げる。

こちらが動くのに合わせて春菜も腰を振る。なんどもセックスを繰り返すうちにお互いの呼吸を覚え、春菜はこちらに突かれるまでもなく騎乗位で自分から攻めてくるようになった。

ペニスに与えられる快楽に頭が真っ白になり春菜の胸を攻める余裕が失われる。春菜の太腿を両手で押さえ、その膣の上側をこそぎ落とすように何度ペニスで責め立てる。

「あっ　ダメですっ　そこっ　きもちいいっ!!」

愛液と精液、そしてお互いの汗が入り交じった濃厚な性交の匂いが満ちるホテルの一室でよがり泣く春菜を繰り返し貫く。何度目かの挿入のあと、ひときわ高い喘ぎを上げた春菜は全身を震わせて絶頂を迎える。

「はあっ……　すみません、先にイっちゃいました……」

息も絶え絶えな春菜が騎乗位のまま身体を倒して抱

きついてくるのを受け止める。押しつけられるHカップの胸の滑らかさが心地よく、衰えないペニスで繋がったままできつく抱き合う。

ついばむようなキスを繰り返したあと、舌を絡めてお互いの口内を蹂躙し合う。

キスを終えて舌を離せば、騎乗位で抱き合っているのですぐ目の前に春菜の顔がある。

「結局、いつもと同じになっちゃいましたね……」

「まあ、そうだな」

お互いに申し合わせたわけでは無いものの、いつの間にか二人の間ではコスプレ撮影とコスプレセックスはセットになっていた。イベントで撮影してからアフターでセックスは当たり前、写真集を撮影するときなどは撮影の途中にコスプレセックスしてから写真を撮ったこともある。

そういったセックスありきの撮影ではないものをやってみようとして私服ポートレートに誘ったのは確かだった。だが結局、パンチラ撮影から野外露出に青姦フェラ、そしてホテルでの獣のようなセックスに落ち着いてしまった。

結局自分たちには、これしか無いのかもしれない。

「サイトウさん、今日撮った写真はどうするんです？」

今回はプライベートのポートレートのつもりだったんだけど……　いろいろ撮ったし私服露出ROMでも作ってみようか？」

「ああ、そういうのも良いですね!!　じゃあ、いつもみたいにディレクションお願いして良いですか？」

使う写真の選定、レタッチ、ROMへの焼き込みから入稿、イベントでの各種設営。こうして身体を許してもらえる代わりに春菜のコスプレイヤーとしての活動を全面的にバックアップしているのは自分だ。

「もちろん。春菜ちゃんの頼みなら何でもするよ」

「やったあ!!　いつも本当にありがとうございます」

騎乗位で自分に抱きついたままの春菜がキスをしてくるのに舌を絡めて返す。春菜だけ先に絶頂を迎えて

しまって射精しないまま春菜の中に挿入されていたペニスが反応して硬度を増す。
「あんっ……　中で大きくなってる」
「まだ出してないからね。春菜ちゃん、立ちバックいい？」
膣奥をペニスでノックしながら訊ねると春菜は恥ずかしそうにうなずく。
都内のど真ん中であるこのホテルの窓からは都心の高層ビルが見える。見下ろせば先ほどまで撮影を行っていた公園を歩く人影が小さく映る。
窓に両手をつき、尻を突き出した状態の春菜をじっくりと視姦する。触っても居ないのにぬらぬらと愛液で光り、襞をひくつかせる春菜の秘所はこちらのペニスを今か今かと待っているようだ。
じらすように亀頭でクリトリスをなんどか愛撫したあと、一気に突き入れると春菜は背中を海老反りにして嬌声をもらす。
「やぁっ　奥、当たってる……!!」

一度春菜をイかせたことだしもう遠慮は要らないとばかりに容赦なくペニスをピストンさせる。まだ昼間と言って良い明るさの中で、ホテルの大きな窓に裸の春菜を押しつけてバックから挿入していく。
「春菜ちゃん、ほら外見て？　丸見えだよ」
「ああんっ　やだぁ……　言わないでください」
外から見られることを指摘すると春菜の膣内が急に締め付けてくる。昼間の公園での撮影でのこともあるし、やはり春菜は野外露出趣味を隠し持っていたのかもしれない。
急速に高まる射精感に真っ白になっていく。そのまま春菜の膣奥を思い切りえぐると、コンドームの中に精液を吐き出す。
しばらく続いた射精が終わってからペニスを抜くと、春菜は何も言わずともコンドームを外して中の精液を飲み干し、さらにはお掃除フェラまでしてくれる。
ここまで出来上がった娘は久しぶりだった。

「ふぁ……　じゃあ、ROMの件、よろしくお願いしますね」
「あ、ああ。あとで詳細をメールするよ」
お掃除フェラを終えた春菜がにっこりと微笑みながらよそ行きのモードになる。さっきまであれほど乱れていたのが嘘のようなその姿に心の中で舌を巻く。
気が付けばデイユースの三時間はもうすぐ終わろうとしている。先にシャワーを浴びに行った春菜をよそに、ソファーに腰掛けて一服する。
ベンチで休憩していたときの自分と春菜の間のこぶし二つ分の距離。
あの距離は、自分と春菜の関係――コスプレイヤーとカメラマンという関係を象徴している。
有名巨乳女子高生コスプレイヤーと望むがままにハメ撮りセックス三昧。これだけの役得を得ているのだ、これ以上を望むなど罰が当たるだろう。
いや、それ以上を求めるべきなのか？
何度目かの自問に、答えは出なかった。

第３章

春菜を狙う黒い影

夏休み明けの休み時間の教室は未だ休み気分が抜けきらない浮ついた空気が漂っていた。

顔を上げればクラスの女子の友人達と何か話している彼女――春菜さんが目に入る。

春菜さんのことは、入学して同じクラスになったたとずっと見てきた。

一年生のクラス、最初の座席の配置で斜め前に座ったのが彼女だった。一見すると野暮ったい眼鏡の後ろに隠れた美少女ぶりと、セーラー服の胸を押し上げる人目を引く巨乳に一目で目を奪われた。

そんな美少女でありながら誰にでも優しく人当たりが良い春菜さんのことを、いつしか目で追うようになっていた。

幸運なことに二年生に進級しても春菜さんとは同じクラスになった。

春菜さんに想いを寄せる男子生徒は多かった――この学校の男子で、彼女のことを何とも思っていない者はそういないだろう

授業の連絡事項やらなにやら、その程度の事務的な用事でも言葉を交わせるのは優越感があった。

そんなとき、インターネットで彼女に出会った。正確には、コスプレした彼女の姿にだ。

眼鏡を外して大人っぽいメイクをしているので、ネットで人気の艦これコスプレイヤー『春菜』がクラスメイトの春菜さんと同一人物だと最初はまったく気が付かなかった。

本名そのままで活動しているので気が付かない方がおかしいと思われそうだが、それは学校での春菜さんを知らないから言えることだ。

なにかツボにはまったのか上品に口に手を当てて春菜さんは大笑いしている。

成績もどちらかと言えば上位、そうでありながらも気取ることはなく。

男子の人気を集めるあれだけのプロポーションなら女子からは嫌われそうなものだが、春菜さんは不思議とそういうことはなく女子達に溶け込んでいた。

そんな春菜さんが休日には艦これの榛名コスプレに身を包んでカメラマン達の前に身をさらし、さらにコミケでは際どい写真を収めた写真集を売っているなど誰が思おうか。

「春菜、それありえなくない？」

「え、そうかなー？」

ぺちゃくちゃとお喋りに興じながら春菜さんが背中の中ほどを越える長い黒髪をかきあげる。癖になっているらしいそのしぐさが、コスプレをしている彼女とクラスでの彼女を結びつけてくれた。

春菜さんには本人も気が付いていないのでは無いかと思える特徴的なホクロの集まりが首の斜め後ろにある。一年生の時に教室で授業中に斜め後ろからずっと春菜さんを見つめていた自分だから気づけたものだ。

コスプレ写真の中で、見返りながら髪の毛をかきあげていたものに見間違えようのないホクロがはっきりと写っていた。それが春菜さんと、榛名コスプレイヤーの『春菜』を結びつけたきっかけだった。

いちどコスネームも本名と同じ『春菜』だとわかってしまえば検索するといくらでも写真は出てきた。密かに集めた春菜さんのコスプレ写真はそろそろ三桁に達しようかという枚数がある。コミケで出していた写真集も通販を使って手に入れた。

人当たりのよい彼女はクラスに友人も多い。

髪の毛に軽く色を入れるのが当たり前の女子達の中で、春菜さんだけは生まれたままの黒髪を貫いているのも好感が持てた。

「そういえば春菜、ちょっと日焼けした？」

「あ、わかっちゃった？　夏休みにさ、家族で沖縄に行ってたんだ」

「えーマジで？　初耳なんだけど？　うらやましーなー　お土産は？」

春菜さん達の話題は夏休み中の出来事に移ったらしかった。『夏休み』『日焼け』『沖縄』というキーワードに、直接の言及は無くともとあるものを想像するのは致し方ない。

「……日焼けって、水着になったってことだよな」
「あの身体で水着とか反則すぎ。うわー、見てみてー」
「グラビアのスカウト受けたりしねーかな。あれなら絶対需要あるでしょ」
漏れ聞こえてきた春菜さんたちの会話をネタに友人達とひそひそと盛りあがる。
「いやー、それは無いんじゃないかな。校則違反になるんじゃね？」
友人達に話を合わせながら時間を見る振りをしてスマホを取り出し、保存してあるネットから拾った春菜さんのコスプレ画像を一瞥する。
可愛らしい容姿と恵まれたプロポーションを備え、その上で眼鏡に黒髪ロングという清楚――地味とも言えるファッションを貫く春菜さんに密かに惹かれる男子は多い。
だが、彼女が裏で人気コスプレイヤーとして活躍していることまで把握しているのは自分だけだという自信があった。

＊

目指すコンベンションホールの最寄り駅の改札を出たところで立ち止まると、キャリングケースを引いた女性達が次々とこちらを追い越していく。
今日は春菜さんが参加すると告知していたコスプレイベントの日、会場は駅から近くに立っているとあるコンベンションホールだった。
ネット越しに写真を見るだけでなく、こうして会場で顔を合わせようと思った原因になった写真を改めてスマホに表示する。
画面に映るのは、ホテルから中年男と並んで出てくる春菜さんの姿だ。
その場面を撮影できたのは全くの幸運のなせる技だった。創立記念日に東京へ遊びに出たあとで、用事があっていつもは行かない東京タワーの近くに立ち寄った。歩いているところでふと目を向けたホテルの

玄関からちょうど良く春菜さんが出てきたのには運命すら感じてしまう。

気づかれずにうまくカメラに収められたのも運が良かった。二人が仲よさそうに話して立ち止まり、周囲に気を取られていないのが幸いしたか。

私服で大人っぽい化粧をしているうえ眼鏡もかけていないのでまず春菜さんだとは判らないだろう。眼鏡をしていないコスプレ姿の写真を大量に見た上で毎日学校で本人と接している自分だから気づけた。

本当に本人か確かめようとホテルから出たあとの二人を少し尾行して、春菜さんが髪をかきあげるときに例のホクロまで確認している。

最初は父親かと思ったが、父親と二人で昼間からホテルに居るというのも不自然すぎる。

つまりは援交か、枕営業か……　そのたぐい。

せっかく得たこの情報だ、うまく使わせてもらうしかない。これを使って、ただクラスメイトとして憧れているだけの立場から一歩抜け出すのだ。

入口に設けられた受付でカメラマン登録を済ませて踏み入れたホールの中はカメラマンとコスプレイヤーでごった返していた。

春菜さんを探して会場内を歩き回ることしばし、壁が全面ガラスになっている外壁そばの所で写真で見慣れた榛名コスプレが目に入る。

数人ほどカメラマンの撮影待ちの列が出来ていたので一番後ろに並ぶ。春菜さんの所に並んでいるカメラマン達はみな重そうな一眼レフに大型の外付けフラッシュを付け、レフ板を持参しているものもいた。

カメラマンとして会場に入るためのアリバイとして持ってきたコンパクトデジカメ一つの自分が周囲から見劣りするようで気後れしてしまう。

撮影と名刺交換、少しの会話を繰り返して列が短くなっていく。並びながら眺めている限りでは春菜さんはどのカメラマンにもにこやかに応対していた。

「すいません、撮影良いですか？」

「はい、大丈夫ですよ」

榛名の衣装をまとった春菜さんをファインダーの中に収める。ネットに上がっている写真は幾らでも見てきたが、こうして生で動いているところを見ると写真とは比べものにならない艶めかしさがあった。

カメラのレンズ越しに春菜さんと視線が合うとどきりとしてしまう。

ポーズを変えてもらいながら数枚撮ったあと、カメラをしまって春菜さんへと歩み寄る。

「撮影ありがとうございました!!　名刺、いま渡しますからちょっと待ってくださいね」

「ええと……　俺、――なんだけど」

「はい？　失礼ですけど……　どこかでお会いしたことありました？」

名前を名乗ると返ってくる、あくまでにこやかに、だがはっきりと壁を作るような春菜さんの態度。去年から二年続けて同じクラスなのにわからないはずが無いから、きっと周りにバレたりしないようにしているのだろう。

ああそういえば、春菜さんはネットでは自分が女子高生だと言うことを公にしていなかったっけ。

「同じクラスの――だよ」

声をひそめてもういちど名前を告げても春菜さんはきょとんとした表情のままだ。

「ほら、学校で……」

「ああ、そういえば」

そこまで言ったところでようやく納得がいったように春菜さんは両手を合わせた。その後で、眉をひそめてこちらを見やる。

「それで、何の用ですか？」

「ええと、その」

心なしかさらに春菜さんの声が冷たくなった気がする。くじけそうになる気持ちを抑え、スマホを取り出して例のホテルから中年男と出てくるところの彼女に向かって見せつける。

「この写真をばらまかれたくなかったら……　わかるよね？」

スマホに写された自分たちの姿を見た春菜さんが目を丸くする。
人気コスプレイヤーという立場である以上、この手のスキャンダルは命取りのはず。
これで彼女は言うことを聞いてくれるはずだ。少々手荒な出会いになってしまったが、ここからお互いに理解を深めていけば良い。
まずはあの男に対してしていたのと同じ事をしてもらうように要求するところから始めようか……
「……ちょっと、こっちで話しましょうか」
撮影待ちの列はちょうど途切れたところなので次を待っているカメラマンが居ないのを良いことに春菜さんは歩き出す。
スマホを操作しながら歩く春菜さんに気後れして話しかけられず、無言の彼女の後に続いてホールから出る。春菜さんに付いて廊下の角を曲がり、ずっと進んだ行き止まりには誰もいない休憩スペースがあった。
自動販売機とベンチが置かれたそこはホールの喧噪から切り離されたように静まりかえっている。
勢いよくベンチに座った春菜さんは足を組み、顎に手を当ててこちらを見上げる。
「……で、どうしたいの？」
わざわざ自分からこんな人目の無いところに案内してくれたのは好都合だった。スマホの画面に表示された、中年男と二人でホテルから出てくる春菜さんの写真をもういちど鼻先に突きつける。
「これ、春菜さんだよね？　この写真をネットにばらまかれたくなかったら……」
そんな写真、公開されたくらいで私が困るってホントに思ってるの？」
鼻を鳴らした春菜さんがこちらの言葉をさえぎる。
「ネットにそれを流して何か起きると思ってるの？　コスプレイヤーとカメラマンがROMのためにシティホテルで撮影するなんて良くあることじゃない」
ラブホテルならともかく、と春菜さんは鼻で笑う。
自信満々に言い切られて脳内で組み立てていたス

トーリーが音を立てて崩れていくのを感じる。ただのコスプレ撮影？　いや、この目で見た二人の親しげな様子はとてもそうだとは思えなかった。
だが、証拠となるものはこの写真しか残っていない。
「クラスのLINEグループに流されたらちょっと困ったけど……　どうせ女の子の友達なんていないでしょ？」
冷たい口調で言い放ちながら春菜さんが髪をかきあげると、ちらりと首筋に例のホクロが見えた。
「勘違いして写真まで撮っちゃって……　それに、もし君の言うことを聞いて私に何かメリットはあるの？　君は私になにを提供してくれるの？　只のどうでもいいオタクの、君が」
ベンチに座ってこちらを見上げたまま矢継ぎ早に春菜さんは言葉を繰り出す。こちらから見下ろしているはずなのに何故だか圧倒される。
「なにも見返りをくれない人に、付き合ってる暇なんてないの、私」
やれやれとばかりに大きくため息をついて春菜さんは立ち上がる。そのまま歩み去ろうとする彼女に、反射的に身体が動いていた。
「待てよ」
立ちふさがって腕をつかむと春菜さんは嫌そうに眉を寄せる。
こうなったら力尽くでも――
君、暴力はいけないねえ」
唐突に後ろから腕を捕まれる。そのまま体勢を崩されて尻餅をつくと春菜さんを掴んでいた手が外れる。いつの間にやってきたのか春菜さんの傍らには例の中年男が立っていた。
「サイトウさん、遅かったじゃ無いですかー」
喜びをにじませた声色で春菜さんが呼びかけ、続いて尻餅をついたこちらを氷のような視線で見下ろす。
「ちょっと良いコスの娘が居てね。撮ってたら時間かかってしまったよ」

「私より可愛いんですか？」
「うーん……　春菜ちゃんには負けるかな」
「またそうやってー　お世辞がうまいんですから」
こちらの存在を全く無視してにこやかに笑い合う二人に、どう反応したらいいのか判らなくなる。
立ち上がることも忘れ、ただ二人の会話を見上げるしかない。
「じゃあ、そろそろホールに戻りましょうか。サイトウさん、今日も可愛く撮ってくださいね？」
「おう、任せときな」
春菜さんが軽蔑のこもった視線をちらりとこちらによこし、そのまま何も言わずにきびすを返す。なにか呼びかけようとして何も言えず、そうしているうちに二人は並んで去って行く。
廊下の角を曲がってコスプレイヤーたちのいるホールに出る直前、中年男がさっと春菜さんの尻を撫でる。身体をくねらせて可愛らしい悲鳴を上げた春菜さんは拳で軽く中年男の肩を殴る。
気心知れた、身体を許した男女同士だからこそのやりとり。
その瞬間をカメラに収めることもできず、ただ見送ることしか出来なかった。

あとがき

初めての方は初めまして。いつもの方はおひさしぶりです。宇古木蒼です。

今回は「榛名の同人誌」でなく「榛名のコスプレイヤーの同人誌」という、たぶん誰もまだやっていないことに手を出してみましたが、楽しんでいただけたでしょうか。みんな表に出していないだけで、こういう話を大好きだって判ってますからね!!　もっと欲望を表に出していこうぜ。

本作は、表紙イラストを担当して頂いたまりりん氏の手による漫画版「コスプレイヤー榛名」と組み合わせて真価を発揮する作りになっています。もし読んでいない方がいたら「コスプレイヤー榛名」のほうもぜひ読んでいただければと思います。

それでは、またどこかの同人誌即売会にて。

書名：コスプレイヤー榛名妄想拡張ディスク
発行日：2015 年 6 月 21 日
サークル：宇古木亭（http://ukogitei.sakura.ne.jp/ ）
著者：宇古木蒼
表紙イラスト：まりりん（http://ssbalternative.blog72.fc2.com/ ）
表紙装幀：星崎連維（@rennstars）
Pixiv：373446
発行人：a-park
印刷所：緑陽社

2015062111008

WYTS3GE-7-37564-573-3
N0007 ¥000E

7984937888993

同人誌14112-40
頒価:本体 時価 円+ 無税
宇古木亭ノベルス

だって私は――コスプレイヤーなのだから。

宇古木亭

「春菜と初めての彼氏、そしてコスプレ」
「カメコおじさんと春菜、露出ポトレ撮影の休日」
「春菜を狙う暗い影」
――以上の三編を収録した「コスプレイヤー榛名」番外編。
Hカップ現役女子高生コスプレイヤー春菜、乱れちゃいます❤

警告

本書は「榛名」ではなく「榛名のコスプレイヤー」の同人誌です。
以上の設定をよく読み、ご自身の性癖に従い、用法・用量を守って
正しくお使いください。

JK Cosplayer Haruna Imagination Appended

コスプレイヤー榛名 妄想拡張ディスク

宇古木亭